神様のメモ帳5
杉井 光
イラスト✽岸田メル
電撃文庫

神様のメモ帳5
杉井 光
イラスト✻岸田メル

Characters

ミンさん

ニート探偵事務所があるビルの1階に店を構えるラーメンはなまる店主。アリスはじめニート探偵団の面々を生温かい目で見守っている。

彩夏

ナルミのクラスメイト。とある事件で重傷を負い、記憶を失ったものの生還を果たす。明るく素直な性格だが、どこかずれてるところも。

平坂組 Hirasaka-gumi

いまどき任侠を気取る不良少年グループ。しかしその実力は侮れない。

四代目

平坂組リーダー。冷徹な性格だが、趣味特技が手芸という隠れた一面も。ナルミと義兄弟の杯を交わしている。

電柱

平坂組、四代目麾下のツートップその1。組の中では縦幅最大。

岩男

平坂組、四代目麾下のツートップその2。組の中では横幅最大。

アリス Alice

ひきこもりの自称《ニート探偵》。PCとぬいぐるみで溢れた自室で、ネットを駆使して真実を暴きだす。普段はいつもパジャマを着て、栄養の大半をドクターペッパーから摂取している。

藤島鳴海 Narumi

本作の主人公。転校を繰り返し人付き合いを避けるようになっていたが、とある事件をきっかけにアリスの助手となる。なにごとにもやる気がなさげなニート予備軍だが、口八丁だけは一人前。

ニート探偵団 NEET Detectives

アリスのもとで合法・非合法を問わず捜索活動をするニートな野郎ども。

テツ先輩

元ボクサーで荒事にたけた武闘派。その一方、パチスロや競馬などに精を出すギャンブル狂。

ヒロさん

女のもとを渡り歩くヒモ。卓越した話術でたくみに情報を引き出す（ただし対女子限定）。

少佐

童顔で小学生にも見えかねない外見をしているが、盗聴・盗撮・爆発物のエキスパート。

Designed by Toru Suzuki

とあるゲーセンの興亡を賭けた真剣勝負。
あの夏の二十二球
P253

大バカ
平坂組の本領ここにあり。
P179
任侠入門編

探偵の愛した博士
P87
小さな酒屋とアリスの蜜月関係。

ラーメンはなまる秘話。
はなまるスープ
顛末
P15
はなまる

Contents

はなまるスープ顛末
探偵の愛した博士
大バカ任侠入門編
あの夏の二十一球
あとがき

みんな胸を張ってプレイしろ。
おまえたちがつけている背番号は、すべて近鉄バファローズの永久欠番だ。

――梨田昌孝（なしだまさたか）

探偵助手というのはいったいなにをやっているのか、とたまに訊かれることがある。たいへん返答に困る質問である。

一介の高校生である僕は、毎日のようにラーメン屋とその上の階にある探偵事務所に通い、丼を洗ったりパジャマを洗濯したりドクターペッパーの買い出しに行ったりラーメンの試食をしたりゲームセンターに連れ立ってしけこんだりギャンブルにつきあわされたりといった無駄な人生を過ごしているのだけれど、これが探偵助手業務だと説明して納得してくれる人はまずいない。

唯一、助手の仕事だと胸を張って言えるのは、事件の記録をつけることである。

「ほう。ならば読ませてくれたまえ」と、探偵に言われた。

我が雇い主であるところの探偵はアリスといって、小学生くらいの女の子である。脚まで届くほどの長さのつやつやの黒髪にクマさん柄のパジャマという、一度見たらぜったいに忘れられないかっこうをしている。

「いや、ひとに読ませるものじゃないから」

「ひとに読ませるものじゃないとは、人類の最大の武器たる言語に対する侮辱だよ！　いいかいナルミ、人と人の間に伝わるものがあるからこそ、ぼくらは人間であり続けられるのだよ。いいから見せたまえ」

よくわからない言葉遣いにふさわしく、探偵は非常にわがままだった。
「だいいち、ここにあるわけじゃないし。僕のＰＣに入ってるだけで」
「それを早く言いたまえ」
しまった、と僕が止めるひまもなく、アリスはベッド脇のキーボードをまるでピアノでも弾くみたいに操作して、画面にひとつのテキストファイルを呼び出してしまった。このちんまい探偵は一流のクラッキング能力を持っているので、僕の家のＰＣに潜入することなど造作もないのだった。
「な、なんだこれはっ」
業務記録をざっと読んだアリスがベッドの上でぴょんと飛び跳ねてこちらを向いた。
「我が探偵事務所が、まるで愚民たちのせせこましい失敗の尻ぬぐいばかりしているみたいに読めるじゃないかっ」
「……だいたいその通りじゃない？」
「きみは死者の代弁者たるニート探偵をいったいなんだと思っているんだい！」
アリスは黒髪を震わせて憤慨し、シーツをばんと叩いた。
「怪我人も死人も大勢出て、きみ自身もぼろぼろに打ちのめされて精根尽き果てて動けなくなったような大事件がいくつもあっただろう、あれはどうしてレポートされていないんだ！」
「そんな余裕なかったからだよ！」自分で言ってて気づけよ。

「とにかくこんな記録書は認めない。ぼくが書き直す」
　そう言ってアリスが、自分の部屋の（とくに、ぬいぐるみたちの）詳細な描写をメガバイト単位で書き加え始めたので、僕はため息をつき、ぴいぴい文句を言って暴れるニート探偵をキーボードから引き離すと、ファイルを元に戻した。僕のPCの中身なんだから勝手にいじらないでくれ。
「わかったよ。もう少し詳しく書く」と僕はアリスに言い聞かせる。「たしかに、どれもつまんない事件だったかもしれないけどさ。だれかしらの人生にとっては、大切なことだったはずなんだよ。だれひとり必死じゃない事件なんて、存在しない。アリスもわかってるだろ？」
　それは、僕が探偵助手になってから学んだ、最も重要な事実のひとつだった。
　この世界のほとんどは、大多数の人間にはどうでもよくて、けれどごく一部の人間にとってはかけがえのない、そんなできごとだけで成り立っている。だから、だれかの泣き声が、そのまわりの人々にまったく届かないことがある。
　そんなとき、都会の空にじっと耳を澄ませて暇を潰しているやつらがいて、たしかにその声を受けとる。
ニートたちだ。
　そうして僕らは、探偵をするのだ。
　アリスはしばらく不満そうに、じっと僕の顔をにらんでいた。やがて、僕の胸に人差し指をぐりっと突き立てる。
「いいだろう。でもいいかい？　ただ事件を記すんじゃないよ」

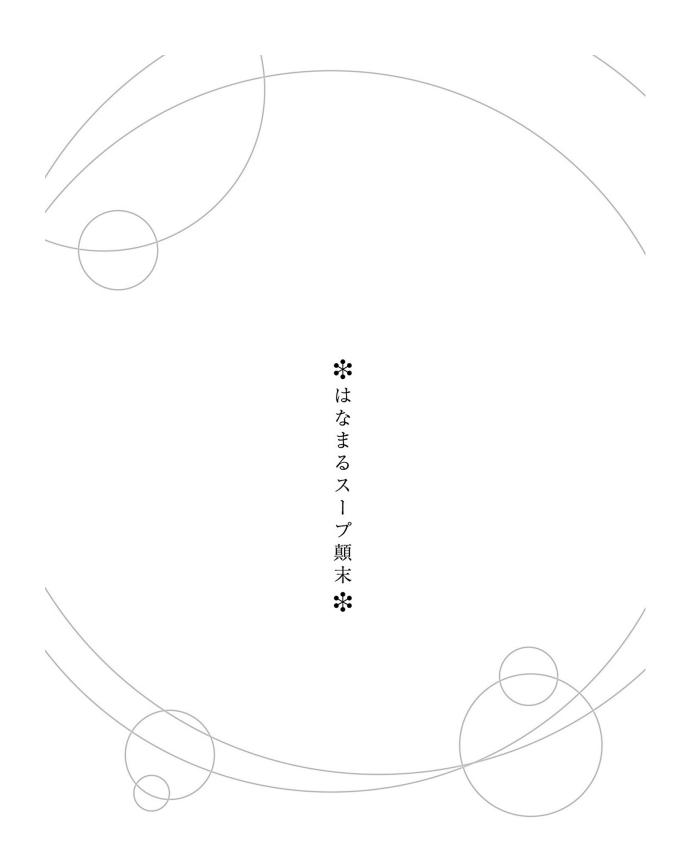
僕の目を下からのぞき込む、不思議な色の海の底。
「きみが、その事件の中にあって、どうしたのか。どうなったのか。どう感じたのか。それだけ書くんだ。ぼくから給料を受けとっている貴重な時間を割いてまで記す価値があるとしたら、それだけだ。わかったかい？」

しばらく考えた後で、僕はうなずいた。

そう、これもけっきょくのところ、僕の物語なのだから。

ここに記された四つは、ごくつまらない、ありふれた事件だ。ドラッグも、二億円の詰まったバッグも、殺人事件もやくざの抗争も出てこない。それでもこの世界に生きるだれかにとっては、この上もなく切実なできごとだ。

もちろん、こうして今キーボードを叩いている僕も、そのだれかの内のひとり。そして読んでいる間は、あなたもまたその内のひとりであってほしいと、心から願っている。

❇はなまるスープ顛末❇

これは僕が探偵助手になってから遭遇した三番目——つまり『エンジェル・フィックス』騒動の次の事件で、その頃から記録をとり始めた僕は、さっそく名前をつけるのに苦労した。ラーメンの細麺とブラジャーの紐とがこんがらがったような、短いけれどちょっと込み入っていて、馬鹿馬鹿しい事件だ。最初につけた、味も素っ気もない事件名をアリスに批判されたので、前述のような題名に変えた。

ほんとうに色々とあったけれど、つまるところ、ラーメンのスープができるまでの物語だったからだ。

*

その店の名前は『ラーメンはなまる』といって、山手線やその他私鉄がぐしゃぐしゃと集まった巨大な駅から歩いて六分、背の低いビルが固まった風通しの悪い袋小路にあった。夜になるとビル風に流されたサラリーマンたちが吹き溜まって、店内はあっという間に満席になり、あふれ出した客は外のパイプ椅子やひっくり返したビールケースに陣取る。そんな店だ。

❇探偵の愛した博士❇

たまにアリスの年齢が気になるときがある。小学校に通っていなかったという話は聞いたけれど、中学にも、とは言っていなかったので、十二歳くらいだろうか。尊大で理屈っぽい物言いに引きずられて実際より高く見えるのかもしれないし、あのひどい食生活のせいで発育が悪いだけで実際はもっと歳が上なのかもしれない。さすがに僕より年上ってことはなさそうだけれど。

アリスは、僕がバイトしているラーメン屋の入ったビルに住んでいる少女だ。３０８号室、『NEET探偵事務所』という馬鹿みたいな看板のかかった部屋にひとりでひきこもって暮らしている。自称探偵なのだけれど、日がな一日パジャマを着てベッドの上でキーボードの前に陣取り、やっていることといえばネット上の色んな場所のパスクラック。陽にもあたらないし運動もしないし信じられないほど少食なので、手足は見ているといたたまれなくなってくるくらい生白くて細い。

これまでいったいどういう育ち方をしてきたのかもわからないし、本名も家族構成も年齢も知らない。自分でも不思議に思う。なにしろ近くにいると色々と疲れるやつなので、名前だの年齢だのといったごく

当たり前の個人情報は気にしているひまがないという面もある。
それでもごくたまに、気になることがあった。たとえばこんなときだ。

✻

五月はじめの夕方、いつものように『ラーメンはなまる』にバイトしにやってきた僕は、さっそく女店主のミンさんに、アリスへの出前を言いつけられた。
「今日は中華丼。あいつご飯ものきらいだから、嫌がったらふん縛って口に突っ込め」
さらしにタンクトップにポニーテイルという武闘派なかっこうをしたミンさんは、アリスの母親代わりみたいな人なのだが、なかなか過激なことを言う。無理もない。なにしろアリスは脅しつけてでも食べさせなきゃ一生ドクターペッパーだけ飲んで過ごすつもりだ。食事させるのはいつの間にか僕の日課になっていた。
ちんまりと赤ん坊の握り拳くらいのご飯に餡がかかったミニ中華丼をトレイに載せて、ビル三階の探偵事務所に行った。
「アリス、入るよ。ご飯持ってきた」
事務所は奥行きのあるワンルームで、寝室は三面の壁が機器類で埋め尽くされた不気味なサイバールームになっている。クーラーの冷風が厳しく吹き下ろすベッドの上で、その日のアリスは腹這いになってキ

ーボードに向かっていた。日陰でみずみずしく育った植物みたいな見事な黒髪がパジャマの背中をほとんど覆い尽くしていて、そこから細い素足が二本にゅっと僕の方に突き出しているので、部屋に入ろうとした僕はあわてて顔をそむけた。

「……ちゃんと着てから作業しなよ」

「今忙しいのだよ。電気信号が回線を流れる速さは光速度、宇宙が定めた絶対だ。普遍定数はぼくの着替えを待ってくれない」

僕の方をちらとも見ずにアリスが言った。彼女の言葉の向こうでは、夕立みたいなキータッチの連続音。

「いや、でも靴下はいてないと風邪引くよ?」

ベッドの足下には脱ぎ捨てられてそのままのパジャマがくしゃりと潰れていて、その隣には真新しい白のハイソックスが出しっぱなしになっていた。マシンで埋め尽くされたこの部屋は常時冷房されているので非常に寒い。いくら温度感覚がおかしいアリスでも素足は寒いだろう、と思ってたらこんなことを言う。

「はかせてくれたまえ。手が離せない」

「ええええ？　僕が？」

「他にだれがいるんだい。わかりきったことを訊くのはやめたまえよ」

「いや、でも」

「説明してもわからないと思うが、メンテナンス中の切り替えタイミングを狙ったクラッキングは一秒差が命運を分ける。まさかぼくが靴下をはいている間にきみがぼくの口述指示でこっちを操作するなんてことを考えているんじゃないだろうね？　作業効率というものを少しは考慮したまえよ」

んなこと考えてねえよ。というかちょっと手を止めて自分でやれよ。

「ナルミ、早く早く」

　片時もモニタから目を離さないまま、アリスは素足をぱたぱたさせて急かした。僕はため息をつき、かなり迷ってから、ソックスを拾い上げておそるおそるベッドにのぼった。

　短パンはちゃんとはいていたので、心底安堵する。

　しかし、客観的に見てみるとかなりやばい光景だと思うので、僕がどのようにがんばってなるべくアリスの素肌に触れないように両脚ともにソックスを通したのかについては詳述しないことにする。はかせている最中にだれかが部屋に入ってきたら僕はそのままインドあたりへ旅に出ていたかもしれない。

「ついでに洗濯もしておいてくれたまえよ」

ようやくいつもの服装に戻ったアリスは、あいかわらずキーボードをものすごい勢いで叩きながらしれっと追加命令する。目を落とすと、くしゃくしゃになったパジャマの下にはレースのフリルが見えた。たぶん下着かキャミソール。僕は一応これでも男なんだが、こいつには羞恥心ってものがないんだろうか……。

事務所の外にある洗濯機を回しながら、その日の僕はそんなことを考えていた。まだ子供だから異性がどうとかは気にしないのかもしれない。いや、アリスのことだからそもそも男を意識するような思考回路は持ち合わせていないのだろう。べつにこっちだって意識してないし。意識してませんよ？

「なんだい、さっきからじろじろ見て。きみはよくよく他人の食事を見るのが好きなんだね。もう悪趣味だと糾弾するのもあきらめたよ」

「え……あ、いや、ごめん」

ベッドに腰掛けて、冷めきった中華丼をレンゲで切り崩している（でも一口も食べようとしない）アリスを、僕は自分でも気づかないうちにじっと見つめていた。

「それにしても、中華丼のご飯抜きでと言ったのに……」

ぶちぶち文句を垂れながらいっこうに口をつけようとしないので、僕は冷蔵庫からドクターペッパーの缶を一本持ってきてアリスに渡した。アリスの身体の半分はこの炭酸飲料でできていると言っても過言ではない。

プルタブを起こしたアリスは、急に思い詰めた顔になって缶を持ちあげ、丼の上で傾けようとした。待てやめろ、それは中華四千年の歴史に対する冒瀆だ！

止めに入る前に断念してくれたので、僕はほっと息をついて、ベッドにもたれてアリスに背を向け考え事を再開する。

ひきこもりのくせに、アリスのまわりにはけっこう男がたくさんいる。元ボクサーのテツ先輩。大学生で軍事マニアの少佐。ヒモのヒロさん。少年やくざの組長である四代目。

ふむ、みんな僕より年上だし、平気でこの部屋に出入りしているけどアリスもとくに意識していないようだから対象外なのかな。お互い気にしないのはなんでなんだろう、あのニートどもは……

「きみがいるからだよ」

いきなり背中から声をかけられてびっくりして振り向く。アリスの苦々しそうな顔。え、僕が？　って、なに、どういうこと？

「きみが食べ終わるまで見張っているせいで、マスターが最近は注文を無視してご飯だの麵だのをたっぷり入れて作るようになった。いい迷惑だ」

アリスは涙目でそう続けた。

「あ……なんだ」

がくり、と肩から力が抜ける。

「なにをそんなにうろたえているんだい。今日のきみはいつにも増して挙動不審だね」

「うるさいな」

冷静になってみるとすげえ恥(は)ずかしいことを考えていたので、僕はつっけんどんに言い返す。まったく、その日の僕はどうかしていた。ひょっとしたらその後出逢(であ)うことになる来訪者を予感していたのかもしれない。

*

空(から)の丼(どんぶり)をトレイに載(の)せて『はなまる』に戻ると、もう店が開いていた。珍(めずら)しいことに開店直後から狭いカウンター席には人影がある。

「――でさ、もう閉めるしかなくて」

「しばらく休業して旅行にでも行ったら。お袋さん連れてさ」

「そんな金ないよ。いやあまいった」

カウンター越しにミンさんと話しているのは若い男の人だった。歳(とし)はたぶんミンさんと同じく二十五、六。精悍(せいかん)な顔つきにまばらなひげがワイルド。ミンさんの知り合いだろうか。

勝手口から厨房(ちゅうぼう)に入ると、「いらっしゃいませ」とその人に会釈(えしゃく)してエプロンをつける。

「あ、あれ、新しくバイト入ったんだ。今度は男の子か。こんにちは」

その人は、とても『はなまる』周辺の人間とは思えないほどさわやかな笑顔を向けてくれたので、僕はびっくりする。

「こんにちは」挨拶(あいさつ)を返しながらも、ちらとミンさんの方を見た。
「これ、わたしの高校のときの同級生。友造(ともぞう)っての。名字(みょうじ)なんだっけ？　いつもともぞーともぞー呼んでたから忘れちゃった」
「ひでえな。岡林(おかばやし)だよ。店の名前と一緒(いっしょ)だろ」
「あ、そか」
　僕はぽかんとして、友造さんと笑い合うミンさんの顔を見つめる。ミンさんの高校時代？　まったく想像がつかない。いや、もちろんミンさんだってハイティーンだった頃があるのだろうけれど。うわあ。すげえ色々訊(き)いてみたい。どんな女子高生だったんだろう。その頃から胸はさらしだったんだろうか「あ痛っ」いきなり後頭部を殴(なぐ)られて僕は厨房(ちゅうぼう)の床(ゆか)にうずくまる。
「なにすんですか」
「なんかろくでもないこと考えてる気がしたからとりあえず殴っといた」とミンさんはひどいことを言う。
その通りだけどさ。
「岡林商店て知ってるか？　おまえの高校の近くにある酒屋なんだけど、こいつはそこの店長。ぼろい店のくせに輸入もんがそろっててさ。高校の頃はわたしもよく友造にくすねてきてもらって飲んだ」
　いや、あの、お酒は二十歳(はたち)からですよ？
「死んだ親父(おやじ)が、若い頃アメリカとか色々回ってたからな。個人輸入はめんどいんだけど俺(おれ)もそのコネで続けてんの。いちばん珍(めずら)しいのは自分で飲んじまうんだけど」

そう言ってはにかむ友造さん。なるほど、このさわやかさはニートじゃないという背景からにじみ出るものだったのか。

「なにがめんどいだよ。おまえも好きでやってんだろ。昔から酒の蘊蓄ならなんでもほいほい出てきたじゃないか。飲み博士とか呼ばれてたんだ、こいつ。酒の話になると止まらない」

ミンさんに突っ込まれて友造さんは苦笑い。

「酒デビューしたくなったらうちに来ればいいよ。死なない程度に強くて、一発でアルコールの怖さがわかるような酒選んでやるから」と僕にも飲み博士の心強いお言葉。「それとも花田にもう飲まされた？　こいつ酒癖悪いから気をつけた方がいいよ」

花田、と言われて一瞬だれのことかわからなかった。ミンさんの名字だっけ。

「友造、それ以上言ったら殴る。それになあ、未成年に酒売ったりしたらもう店おしまいだぞ。ただでさえ潰れかけてるんだろ」

あんたが言うなよ。……じゃなくて。潰れかけてる？

「あー。うん」

友造さんは苦い顔になって、頭を掻いた。

「隣にでかいスーパーができてさ。おまけに変なこともあって、ちょっと休業中なんだよ」

「変なことって——」僕が訊こうとしたとき、厨房左手の勝手口がいきなり開いた。湯気が風に乗って吹き出し、長い黒髪が揺れる。

「友造、来てるなら来てると言いたまえ！　なんでこんなにせっぱ詰まるまで相談しないんだ、きみのためならなんでもすると言ったのに、ぼくを信頼していないのかい！」
「なんだよ有子にまで話してんのか……」
　友造さんのぼやきを遠く聞きながら、僕は唖然としてアリスを見つめた。アリスがわざわざ客のために事務所から下りてきたのもはじめて見たし、だれかがアリスのことを本名で呼ぶのもはじめて聞いたし、それに、ええと、きみのためなら……なんだって？　ともかく僕はあまりにびっくりしていて、ミンさんに後頭部を小突かれるまでぼうっと立ちつくしていた。

*

　翌日、学校の帰りに岡林商店に寄ってみた。
　僕も見知っている店だった。高校の裏門を出て五分くらい。お酒だけではなく、清涼飲料や味噌・醤油なんかの日常食品も扱っている、昔ながらの小さな商店。自転車で前を通ったこともあったのだけれど、高校生にとっては用がない店だったし、看板も日に焼けてかすれていたので店名は全然憶えていなかった。
　隣には、スーパーマーケット『リコマート』。店頭には開店セールの幟がはためき、駐車場は車でいっぱいだった。さすがにこれは相手が悪いなと思いながらも、そのスーパーの駐輪場に自転車を駐める。

岡林商店の敷地は、スーパーの駐車場に食い込むような位置だった。休業中と張り紙されたガラス戸を叩くと、中でごそごそ音がして、やがて戸が開く。
「はいよ……あれ、ナルミも来たのか」
　顔を出したのは友造さんではなかった。
「先輩？　なにしてんですか」
「検品の手伝い」そう言ってテツ先輩は暗い店内をあごでしゃくる。と、奥から腰エプロンをつけた友造さんも姿を現した。
「押し掛けて来といて、なにが手伝いだよ。隙見て酒くすねようとしてるだけだろ」と、友造さんは笑ってテツ先輩の肩をどつく。
　先輩は僕の高校をだいぶ前に中退して、今はパチプロをやっている人。友造さんもかなりいいガタイをしているけど、こうして並んでいるところを見るとテツ先輩はさすが元ボクサー、筋肉のつき方がちがう。
「先輩も知り合いだったんですか」
「そう。俺らに酒の飲み方教えてくれた師匠」と先輩。あんたもまだ十九歳じゃなかったか？
「有子に言われて来たの？」
　友造さんに訊かれて、とっさに首を何度も振る僕。アリスの態度が気になったので、友造さんがどんな人なのか知ろうと思ったのだ。なんてことは言えない。

「僕が勝手に来ただけです。一応、現場見て話聞いておこうかなって」
「まあ、入れよ」
　店内はひんやりと冷房が効いていて、棚や冷蔵庫には布がかけてあり、うら寂しい。床には日本酒や果実酒、ウィスキーといった酒瓶がずらっと並べられていた。
「あら、もう一人お客さん？」
　カウンターの奥、のれんの向こうからおばさんの疲れ切った顔がのぞいて僕を見た。すぐ中に引っ込むと、コップを三つ載せたお盆を持ってまた現れる。
「ごめんなさいねえ、こんな、ほっとけばどうせ潰れるような店なのに」
　おばさんはカウンターの上に、烏龍茶の入ったコップを三つ出してくれた。一つを受け取って一気飲みした友造さんが毒づく。
「だからほっとくとやばいんだろ。いいからお袋は帳簿やっといて」
　はいはい、と言って、おばさんは奥に戻った。今の人が友造さんのお母さんか。
「お店は二人でやってるんですか」
　多少は探偵らしいことをしようと思い、友造さんに訊いてみる。たしかお父さんは亡くなったと言っていた気がする。

「そう。俺なんて配達で出ずっぱりだからさ。お袋もずっと店に座ってたわけじゃないし。いつやられたのかわかんないんだよ」
　友造さんは表情を曇らせて、床に並んだ酒瓶に視線を落とした。

　友造さんの話では、それを最初に見つけたのは、毎月日本酒をケース配達で買ってくれているお得意さんだったという。
「飲む前に、色とにおいでわかったってさ。気づかなかったのは酒屋として恥ずかしいよ」
　酒に、黒い異物（おそらく醤油）が混ぜられていたのだ。酒瓶は茶色いから、外側からではとっさに気づかないのも無理はない。
「どうやって中に混ぜたんですか？」
「蓋が開けられてンだよ。ほら」
　テツ先輩が、足下にあった瓶の一本を手渡してくれた。ごく普通の、薄い金属製のキャップが瓶の口にかぶせられている。キャップのいちばん下の部分にぐるりと切れ目が入っていて、強くひねるとそこがちぎれてキャップが回るようになるタイプ。
「……あ、接着剤でくっつけてあんのか」

単純な細工だった。いっぺん開けたキャップをしめて、ちぎれた部分を瞬間接着剤かなにかでつないである。注意して見ればすぐわかる。

　明らかに人為的な工作の痕跡だ。

「ひでえことするよな。こんないい酒なのに。もう五本も見つかったんだ」とテツ先輩はうらめしそうに酒の群れを見下ろす。

「こんなことがあったからには、店の在庫全部チェックするまでお客に酒なんて売れないよ」

　消沈した顔で友造さんが言う。そうか。それで休業して、テツ先輩まで駆り出して検品してるのか。

「警察には——」

　僕が言いかけた問いに、友造さんとテツ先輩はそろって首を振った。

　できれば警察には知らせたくない。その事情が僕にもすぐに呑み込めた。大袈裟にしたら店の評判はがた落ちになる。

　でも、だれがいったいなんのためにこんなことをしたんだろう。ただのいたずらにしては手が込んでいるし。

「なんか、脅迫状とか来たりしてません？」

　友造さんは苦笑して首を振った。

「うちみたいな貧乏酒屋脅してどうすんだよ。だれが得するってんだ。ほんとわかんねえ。なんでこんなこと」

僕ら三人がそろってうつむいて黙り込んだとき、暗い店内にいきなりハードロックのけたたましいギターリフが鳴り響いた。僕はあわててポケットから携帯電話を取り出す。『コロラド・ブルドッグ』の着信音は、アリスからだ。

『もう授業は終わっているのだろう、テツが現場に行っているはずだから、きみも事務所に来る前に——』

「あ、うん、今岡林商店にいるんだ」

遮って言うと、電話口の向こうでニート探偵はほんの一瞬言葉を失った。

『……きみにしては珍しい気の回しようだね。どうしたんだい』

「いや、べつに」僕はとぼける。「それより、友造さんから詳しいこと聞いたよ」

酒瓶の細工のことを話した。

『ふむ。わかった。とりあえずその工作済みの瓶を一本持ってきてくれたまえ、調べてみたい。少佐とヒロも呼んだから友造にそう伝えて』

「おい、ちょっと待て有子、なんにも頼んだ憶えはないぞ、おおごとにすンな、うちの店の問題なんだから」

友造さんが僕の携帯に顔を近づけて怒鳴る。

『きみの問題はぼくの問題だろう!』

負けじとアリスも声を張り上げたので、僕は思わず携帯を遠ざけてしまう。
『ぼくがどれだけ大切に思っているか知らない振りをするつもりじゃないだろうね。きみの店を守るために依頼なんて必要ない、きみがどれだけつまらない意地を張ろうとも、ぼくはぼくで勝手に全力を尽くすからね！』
　通話が切れた後も、僕はかなり長い間、呆然（ぼうぜん）として友造さんの顔を見つめていた。
「……あいかわらずだな、あいつ」
「俺（おれ）らに任せてくださいよ。友造さんから金取ったりしません。どうせヒマだし」
「いや、金の問題じゃなくてさ」
「俺も報酬（ほうしゅう）はヘネシー一本で我慢（がまん）します」
「てめえにやる酒は一滴（いってき）もねえ帰れ」
　二人の会話を僕は遠く聞いていた。アリスの言葉が信じられなかった。どれだけ大切に思っているか、だって？
「……ルミ、おいナルミ」
　テツ先輩に頬（ほお）をはたかれて、我に返る。
「え？　あ、は、はい？」自分でもどうかと思うくらいうろたえてしまった。
「なにぼーっとしてんだよ。ほら、これ混ぜものされてた酒。アリスんとこに持ってくんだろ。ぐずぐずしてるとまた怒るぞ、あいつ」

先輩は僕の腕に茶色の瓶を一本押しつけ、ぐいぐいと店の外に追い出した。
「俺、まだ検品手伝ってるから」
「……あ、はい」
「なんだよ。今日のナルミ、変だな。大丈夫か？　ニートがついに脳に回ったのか」
「い、いえ、なんでもないです」
アリスと友造さんてどういう関係なんですか？　という問いを、僕はぐっと呑み込んだ。そんなこと、とてもテツ先輩には訊けない。
でも、このときに訊いておくべきだったのだ。そうすればもう少しましな結末になっていたはずなのに。

あまりに上の空だったので、スーパーの駐輪場から出るとき、ちょうど入ってきた白い外国車の巨体にも気づかなかった。バンパーに前輪を引っかけて盛大に転んだ。
「――大丈夫ですかっ?」
車の窓が開いて、髪の長い女の人が顔を出す。僕は尻餅をついたままがくがくうなずいた。
女の人は車を駐車場のいちばん手前に駐めると、降りて駆け寄ってきた。白のワンピースに淡いベージュのカーディガン、やたらと品の良いかっこうをしたきれいな人だった。

「怪我はない？　平気？」
　僕はまだ混乱しきって自転車の下敷きになっていたので、車体を引っぱり起こしてくれる。
「いや、大丈夫です、ほんとごめんなさい」
　そこで酒瓶のことを思い出して、リュックに手をやり、ほっとする。割れてない。
「よかった……」と女の人はため息をつく。
「すみません、ぼーっとしてて」へこへこ頭を下げながら、自転車に乗った。
　車道を横断したところで、ふと振り向いた僕はさらに困惑することになる。
「こんにちは、ともくんいる？」
　さっきの若い女の人が、岡林商店の戸を叩いているところだった。……だれだあれは？　友造さんの知り合い？

✻

　日本酒の瓶を開けてちょっとにおいを嗅いだアリスは、おえっと舌を突き出して瓶を僕に突っ返した。
「人類は穀類を手にしてすぐにアルコールの醸造を始めたというが、理解に苦しむね。こんなものを飲みたがるなんて」

そんなことを言う彼女のまわりにはドクターペッパーの空き缶が城壁をつくっているのだから全然説得力がない。
「だれにでも、酔っぱらいたいときってのがあるんだよ……」
　キャップをしめながら、知ったかぶりをしてみる。
「ほう？　まるできみにもそういう時期があるみたいな口振りだね」
　アリスが毛布を肩からかぶって、いたずらっぽく微笑むので、僕はばつが悪くなって目をそむける。
「まあね。頭が混乱してるときとか」
「ますます混乱するだけじゃないのかい」
「ええと、『星の王子さま』だったかに、酔っぱらいがどうして酒を飲むのか書いてあったよ。恥ずかしいのを忘れるためなんだって」
「なにが恥ずかしいんだい」
「酔っぱらってるのが」
　アリスは長い髪をベッドじゅうに振りまいて大笑いした。
「素晴らしいね。生きることそのものみたいじゃないか」
　目尻の涙をぬぐいながら彼女は言う。そんなに面白いか？　僕は吹き下ろすクーラーの風の中で、だんだんと自分の混乱がどうでもよく感じられるようになってきた。

「その循環論法に陥った酔っぱらいをぜひ外部から眺めてみたい。ナルミ、それは貴重な証拠品だが半分くらいなら飲んでもかまわないよ」

「飲まないよ」つうかこれ、醤油だかなんだかが混ざってるんだぞ？「あのさ、軽々しくそういうこと言っちゃだめだよ。酔っぱらったら僕だってなにするかわからないよ？」

「たとえばどんなことをするというんだい？」

　きょとんとした顔で訊かれた。

「いや、ううん」

　真面目に返すなよ。色々想像しちゃったじゃないかよ！

「大丈夫。きみがどんな痴態を晒そうとも、ぼくがこのハイエンドなデジタルビデオカメラで余すところなく撮影して、ウェブの広大な海に放流し歴史的資料として広めてあげよう」

「やめてくれ」

　僕はため息をついて、酒瓶を冷蔵庫に突っ込んだ。なんかもうほんとに色々どうでもよくなってきた。

「ところで、細工されていた酒瓶は日本酒だけだったのかい」

「え？　あ、あ、うん、いや」

　アリスが唐突に話を戻したので、ちょっと目眩がしてしまう。

「日本酒だけじゃなかったな。ウィスキーとかラム酒もやられてた」

「ふむ。すると、卸売の段階で細工されていたという可能性は排除されるね。やられたのは店に入荷した後か」
　なるほど。岡林商店は酒の種類によって色んなルートから仕入れているらしいから、日本酒にも洋酒にも混ぜものがされていたとなれば、店に酒が運び込まれてから工作されたと考えるのが自然だ。
「でも、なんの目的でこんなことするんだろ」
「さて。混ぜものを解析に回してみないとなんとも言えないけれど、飲んだ人間を傷つける目的ではないとしたら、傷つくものはもう一つしかないね」
「……店の評判？」
「今のところ妥当な考え方はそれしかない。再犯の可能性もあるからね。少佐の出番だ」
　少佐というのはテツ先輩と同じくアリスの仲間の一人。盗撮盗聴不法侵入のエキスパートだ。当然、それを防ぐ術にも長けている。今回もがんばってくれることだろう。
　例によって、僕のできることはどんどんなくなっていく。
　アリスはやる気満々だった。やれやれ。友造さんのために――ねえ。
「友造の店に手を出すなんて赦しがたい。ぼくの全身全霊をかけて見つけ出してやる」
　これはやっぱり、友造さんに、つまりその、特別な感情があるってことなんだろうか。おかしいことじゃないんだけど。一応女なんだし。

もやもやした気持ちを抱えたまま、僕は事務所を出た。

✿

次の日からゴールデンウィークの後半。でも花壇の世話をするために一旦学校に行ってから(これでも僕は園芸部員なのである)、岡林商店に足を延ばした。

ライバル(?)店の『リコマート』はその日も大繁盛、駐車場も満車で、岡林商店の前にまで路上駐車している。……あれ？　この白い外国車、どこかで見たような。

店のガラス戸をノックしようとしたとき、中から女の人のきつい声が聞こえてきた。

「……んでわたしに言ってくれないの！　そんな、よくわからない子供たちに頼むなんて」

「俺が頼んだわけじゃねえぞ」と、これは友造さんの声。「それに、うちの問題で、おまえには関係ないから」

「ともくんはいつもそればっかり、関係ない関係ないって！　もういい、わかった」

出直そうかと思案している僕の目の前でいきなりものすごい勢いで戸が開いて、女の人が姿を現す。

「意地張ってて手遅れになっても知らないから！」と言い捨てながら早足で出てきたので、僕に気づいていなかったし、よけるひまもなかった。

「きゃっ」

女の人と揉み合って仰向けに倒れた。砂埃が舞い上がり、目の前で星が散る。

「……ご、ごめんなさい、大丈夫？」
「え、あ、はい……」
　答えようとすると、口の中で鉄の味がした。どこか切ったかもしれない。女の人は素早く立ち上がると、スカートの砂を払って、それから僕の腕をつかんで引っぱり起こした。
「……あら、あなた昨日の」
「あ」
　駐車場で車にぶつかったときの、あの女の人だった。二度目だ。僕らはどちらからともなく恥ずかしくなって目をそらす。
「なにやってんだよ」と戸口から友造さんが顔を出す。女の人は「なんでもない！」と即座に言い返すと、路上駐車した車の方に走っていってしまった。
「あー、なんかみっともないとこ見られちゃったな」友造さんはぼりぼりと頭を掻いた。

「あんないいお嬢さんがうちの息子とどうしてつきあってんのかねえ」
　暗い店内のカウンター裏。僕に麦茶を出してくれながら、おばさんが言った。
「あんたも、もっと大事にしないと逃げられるよ。お父さんに似てがさつなんだからもう」

「うるさいな」

「心配してくれるのなんて、あの娘（こ）くらいじゃない。店のことより、そっちを考えなさいよ。いい機会だって言うと変だけど……店畳（たた）んで身固めたら」

「馬鹿、借金残ってんだろ」

「隣（となり）が駐車場（ちゅうしゃじょう）欲しがってんだし、土地売れば」

「いいから引っ込んでろって」

「あんたねえ。真面目（まじめ）に考えなさいよ」おばさんが声を張り上げた。

「うるせえな。考えてるだろ」

「女の言うこともちょっとは聞きなさいって言ってんの。なんでもひとりで勝手に決めて、ほんとだれに似たんだか」

「そんなに言うなら、お袋は店に出なくていいよ、隠居（いんきょ）して茶でも飲んでろよ。店は俺（おれ）ひとりでどうにかするから」

「そういうこと言ってんじゃないでしょ！　由美（ゆみ）ちゃんともまともに話し合って——」

　僕は首をすくめてその生々（なまなま）しい会話を聞いていた。おばさんがようやく僕の存在を思い出したのか、こちらをちらっと見て口をつぐみ、咳払（せきばら）いして目をそらすとカウンター右奥の家の方に引っ込んでしまった。

　普通に働いて生きるって大変そうだなあ。経営とか結婚（けっこん）とか。

「……さっきの人、友造（ともぞう）さんの彼女だったんですか」と小声で訊（き）いてみる。
「由美のこと？　あー、うん、まあ、そんな感じ」と、友造さんは言いにくそうに答える。そうか。恋人いたのか。じゃあ、アリスのあれは、ええとつまり、片思いか。そうか。なんで僕は安堵（あんど）しているんだろう、と訝（いぶか）りながらも麦茶を飲み干す。
「土地売るとかどうとか」
「隣（となり）の店、駐車場が足りてないんだってよ。工事する前から、店長だとかいうしつこいおやじが何度も頼みに来てるよ」
　僕は考え込む。たしかにこの店の敷地（しきち）は（リコマートからすれば）ずいぶんと邪魔（じゃま）くさい位置にあって、駐車場にしてしまえば面積以上に広く使えることだろう。たぶん、近隣（きんりん）の土地の買収を完了してから着工するはずが、手間取ったので見切り発車してしまったのだと思う。
　これで一つ、この店が潰（つぶ）れて得する者がいることがわかったわけだ。でも、それだけのことで店に忍（しの）び込んであんな細工（さいく）をするだろうか。
「なんかもう色々腹立ってきたなあ。商売と関係ないことでさ。酒好きに美味（うま）い酒売ってたいだけなんだけどな、俺は」
「しかしこの店のセキュリティはイタリア軍なみのお粗末（そまつ）さですよ」
　いきなりすぐ近くから声がして、僕も友造（ともぞう）さんも腰（こし）を浮かせた。

「――少佐？　どこから入ってきたんだ」
　友造さんが素っ頓狂な声をあげる。いつの間にか、カーキ色の人民服みたいなものを着てヘルメットをかぶった小さな人影が僕らの真ん中に出現していた。
「裏口をピッキングしました。五秒とかかりませんでしたよ。なんという防犯意識の低さ。世間には犯罪者が跳梁跋扈しているというのに」
　あんたとかな。
「藤島中将も来ていたのなら、さっそく手伝ってもらおう。カメラ設置とロックの強化」
　藤島中将というのは、少佐しか使わない僕のあだ名である。バックパックからじゃらじゃらと色んなパーツを取り出して、嬉々としてカウンターの上に積み重ねる少佐。小学生なみの身長と童顔だがこれでも現役大学生である。
「おい、ちょっと待て少佐。これけっこう金かかるんだろ。うちに今そんな余裕ないぞ」
「友造さんからは一ペリカももらいませんよ。全部アリス持ちだそうで。ということで今回は試験も兼ねて、不必要に高性能なカメラを用意しました。このサイズにして、１０００メートル先からでもおすぎとピーコの区別がつくほどの解像度を実現！」
　３メートル先だって区別つかないよ。じゃなくて。費用もアリスが出すのか。なんかもう泣けてくるくらい献身的だ。
「なんだか物々しいねえ」

防犯カメラ設置を始めた僕らを、おばさんは奥から心配そうに眺めていた。カウンターの後ろから倉庫に向かって廊下がのびていて、廊下の途中の左手には商品搬入用の裏口がある。侵入経路の第一候補なので、この裏口の外に向けてまず一台。店の正面外にも一台。そして、入ってすぐの頭上から店内を広く撮す一台。

ノートPCを広げてカメラチェックをする少佐はひどく嬉しそうだった。店の中を勝手にいじくり回されている友造さんは不機嫌そう。

「念のため倉庫内にも一台置きたいのですが」

廊下の突き当たり、倉庫の戸を押し開いて中の暗闇をのぞき込みながら少佐が言う。

「中、真っ暗だぞ」

「む？　照明はないんですか」

「あるけど普段はつけない。酒の保存には光当てちゃだめなんだ、ほんとは」

へえ。そういえばワインは地下室で保存するけど、他のお酒もその方がいいのか。

「いや、しかし防犯上――」

「大丈夫だよ。他に入り口ないんだから」

友造さんは倉庫の電気をつけて僕と少佐を中に案内してくれた。

倉庫の照明は暗く、冷房が効いているのか、空気はひんやりと乾いていた。無骨なスティール製のラックが並び、そのすべての段を様々な種類の酒がぎっしりと埋め尽くしている。それでもなお場所が足りず、床にも段ボール箱やプラスチックケースが積んであった。

少佐は倉庫のあちこちを嗅ぎ回ったけれど、そもそも窓の一つもない。天井に通風口があるけどさすがにあそこから入るのは無理だろう。

「まあ、これなら壁を破壊でもしない限り大丈夫でしょうが……」

酒だけではなく、醤油やみりん、サラダ油なんかもいちばん奥の棚に置いてあった。そこで僕は奇妙なものを見つける。

最下段の左奥。ずんぐりとした丸っこいものがうずくまっていた。かがんでのぞいてみると、ぐりっとした両目と視線が合う。びっくりして尻餅をつきそうになってしまった。

それは一抱えほどもある陶製の置物だった。狛犬——だろうか。

「狛犬じゃなくてシーサー」と友造さん。「親父の形見なんだよ、それ。ついこないだ棚の裏で埃かぶってんの見つけたんだけど」

そう言われて、僕はあらためてその不思議とユーモラスな獣の顔を見つめる。シーサーといえば沖縄の守り神だ。狛犬と同じように二匹で一組だった気がするんだけど。

「ああ、うん。品薄の限定品でさ。親父もほうぼう探したんだけど、一匹しか手に入らなかったらしい。片割れ見つける前に死んじまった。だから今、俺が探してんの」
友造さんは僕の隣にかがみ込むと、シーサーにビニルシートをかぶせた。
「こいつが無事でよかったよ。再来週の日曜日までになんとか片割れ見つけたいんだけどな」
再来週の日曜？　五月十三日に、なにかあるんだろうか。
でも、友造さんは「これ内緒だぞ」と言って立ち上がった。棚によじ登って、通風口から侵入できないかどうか真剣に検証している少佐を引きずりおろすと、僕と一緒に倉庫から押し出して照明を落とす。

カメラの解像度を自画自賛する少佐を残して店を出た。一生やってろ。
自転車の駐めてある店の裏に回ったとき、水色のワンピースの背中が目に入った。さっきのあの女の人だ。店の裏口から小走りに離れると、路上に駐車してあった白い車に乗り込んだ。ついさっきまで店の正面にあったあの車だ。なにしてんだこの人。帰ったんじゃなかったのか。
運転席の女の人も、僕にはっと気づいた。あわてたそぶりでエンジンをかけ、バック発進してあっという間に視界から消えた。

……と思ったら、戻ってきた。なんなんだ。車は唖然とする僕のすぐ目の前までやってきて停まると、窓が開く。
「あ、あ、あの、ごめんなさい、あの」
首だけ出した女の人は、僕とミラーを交互に見ながら言った。
「あなたって、ともくんの後輩かなにか？」
「い、いえ？」
「えっと、じゃあ、あの、なんだったか、ラーメン屋の……」
「あ、そう、そうです」
あなたがさっき言ってた、よくわからない子供たちの一人ですよ。とはさすがに言えない。
女の人はしばらくステアリングを両手で握りしめたまま、下唇を噛んで迷っていた。やがてまた顔を上げる。
「ねえ、ほんとに悪いんだけど、これから少し時間ある？」
……ええ？
女の人と喫茶店に入るのは生まれてはじめてだった。細長い店内の一番奥の席に案内される。ウェイトレスさんが行ってしまうと、その女の人は一枚の名刺を僕に差し出した。

株式会社和久井食品　広報課
和久井　由美

聞いたことのある食品会社だった。よくテレビCMもやっている。

「あれ？　この名字」

「あ、うん、父が社長なの」

僕は思わず名刺と、和久井由美さんの顔を何度も見比べてしまう。社長令嬢か。はじめて見た。なるほど納得。うんうんそんな感じ。

「……なあに？」

「え、いや、なんでもないです」

由美さんはちょっと首を傾げたけれど、そのまま話を続けた。

友造さんとは、つきあい始めてからもうかれこれ三年くらいになるという。岡林商店は和久井食品がまだ街の乾物屋レベルの小さな問屋だった頃からのつきあいだが、日常食品ばかりの取引で、酒は和久井からは一切仕入れようとしなかったらしい。そこで代替わりを機に、うちからも酒を仕入れたらどうかと説得しに岡林商店に出向いたのが、営業時代の由美さんだったのだそうだ。

「それでともくんと初対面。おまえんとこの扱ってる酒は全部不味いから仕入れないって言われて、大喧嘩になって」
　酒に関しちゃ容赦ないんだな、あの人。
「それがきっかけで色々あってつきあうことになったの」
　ええええ？
「……あの、すいません、話のつながりが全然わかんないんですけど」
「そうね。わたしも実はよくわかってない。なんで一緒にいるのか。今もしょっちゅう喧嘩してばっかりだし」
と由美さんは笑う。ほんとにつきあってんのかよ。そういえば、友造さんのお母さんが身を固めろとか言っていたような気がするから、それくらいの仲ではあるのかな。
　でも、それを聞いて由美さんは苦笑する。
「その話でも何度も喧嘩してるの。わたしは和久井を継ぐことにしてるから……でも、ともくんがどうしても嫌がる。お店があるからって」
　婿養子ってことか。ああ、それで身を固めるには店を畳むっていう話になるのか。
「それで、最近不安になるの」
　ちょうどウェイトレスさんが紅茶とコーヒーを運んできたので、由美さんの言葉が途切れる。長いまつげを伏せて、しばらくカップを満たす琥珀色の液体にじっと見入っている。僕はそっとブラックのままコー

ヒーをすすった。
　なんで僕、初対面の女の人と、喫茶店でこんな話してるんだろう……。
「だから、あなたに訊きたいんだけど」
　由美さんは顔を上げた。切実な目つき。
「ともくんがよく顔出してる、そのラーメン屋に集まってる人たちって、どんな人たち？」
　なんでそんなことを？
「ともくん、なにも話してくれないの。だからお願い」
「ええと……」
　あそこに集まる連中といえば、元ボクサーでパチプロのテツ先輩。ミリタリーマニアの少佐。ヒモのヒロさん。それからたまに来る、少年やくざの組長の四代目。全員、ろくに学校にも行かず仕事もしていないニートたちばかりだ。
「……みんな男の人？」と、由美さんが思い詰めたような視線でさらに訊いてくる。
　ああ、なるほど。不安ってそういうことか。なんだかなあ。心配しているようなことはないと思いますよ、と言おうとして、僕ははたと思い当たる。
「……女もいないわけじゃないですけど」
　由美さんの顔色が変わる。やばい。これ黙ってるべきだったんじゃないのか。
「どんな人？」

「えと。ひきこもりの探偵です。いつもパジャマ着て部屋に閉じこもってネット漬けの」
口を半開きにして由美さんは固まる。当然の反応だった。
しかし、後から何度考えてみても、このときの僕はどうかしていたとしか思えない。だって普通、『ラーメンはなまる』にいて由美さんの疑惑に引っかかりそうな女っていったら――
アリスじゃなくて、まずミンさんだろ？
もちろんそれは、アリスが友造さんへのやたらと切実な想いをあらわにするところを何度も見ていたせいだ。思い込みって怖い。

喫茶店を出たところで僕らは別れた。
「ごめんね、初対面なのに変な話しちゃって」
由美さんはすごく恥ずかしそうに言う。僕は首を振った。たぶんそういう星巡りのもとに生まれついているのだ、僕は。公園のゴミ箱みたいなものだろう。はじめて来た人も気軽になにか捨てていく。
「今日話したこと、ともくんには内緒にね」
そう言って由美さんは車に乗り込んだ。
車道を駅の方へと走り去る白い車体を見送ってから、僕は逆方向に足を向ける。

ややこしい話になってきた。そのわりに、僕の腹にたまっているこの無気力感はなんだろう。どうにも今回の事件はやる気が出ない。いや、やる気なんていつも持ち合わせていないのだけれど、今は自分をごまかす言い訳さえも浮かんでこない。

アリスが友造さんのためにがんばってるのがそんなに気にくわないんだろうか。なぜ？

こんなんじゃだめだ、と自分でも思う。これは仕事だし、僕は探偵(たんてい)助手なんだから。

✻

　翌日金曜日はバイトの日だった。ちょっと家での用事が長引いて、ラーメン屋に着いたのは開店一時間前。だいぶ遅刻だ。ミンさんに怒られてしまう。
　店の前には青い軽トラックが駐(と)まっていた。側面に白抜きで『岡林(おかばやし)商店』の文字。
　しかも店の戸はもう開いていて、中から複数の男の人の声が聞こえた。僕は勝手口に回ってそうっと厨房(ちゅうぼう)に入る。
「遅いぞナルミ」
　強火にかけた中華鍋(ちゅうかなべ)を見つめながらミンさんが言った。僕は首をすくめる。
「悪いな、開店前からお邪魔(じゃま)してるよ」
　カウンター席に座った友造さんが笑いながら言う。その横で早くも餃子(ぎょうざ)をつまみに一杯やり始めているのは、常連のおっさん二人だ。たしか(自称)中古車のディーラーと、(自称)不動産経営だったかな。
「いらっしゃいませ」
　急いで手を洗ってエプロンをしめた。
「友造さん、いいんですか車で来たのに飲んじゃって」

❇大バカ任侠入門編❇

ヤクザ、と聞いてどんな人間を思い浮かべるだろうか。たぶん、パンチパーマやスキンヘッドやオールバックの頭で、目つきの悪さを薄い色のサングラスで引き立てて、季節を問わずアロハシャツや珍妙な色のスーツや柄入りのYシャツを着て、ミミズとすれ違っただけでも眉を寄せて凄む男。そんな感じじゃないだろうか。

でも、これはテレビや映画のせいで偏って形成されたイメージなのである。

僕はごく普通の都立校に通う高校二年生なのだけれど、幸か不幸か、知り合いにヤクザが大勢いる。不幸だと言い切れないことがいちばんの不幸かもしれない。いっぱい世話をしたりされたりしているからだ。ヤクザについて一般人が知りようのない実像も、知っている。

……なんて前振りはしてみたけれど、『ほんものは一目でそれとわかる格好はしていない』みたいな豆知識を披露する話ではない。僕の知っているヤクザたちも、全国平均からはかけ離れているだろうからだ。

僕がヤクザに対して抱いているイメージというのは、ごく単純——

ただの馬鹿、である。

❇あの夏の二十一球❇

その夏の終わり、僕の心をとらえたのは、球場の青空に吸い込まれる白球だった。

なにしろ夏休みはほとんど仕事で潰れた。ニートたちとたむろしたり、アリスにドクターペッパーを運んだりといったいつもの人生浪費ではない。イベントコーディネイトという正真正銘の労働である。くわえて、前述の通りの誘拐事件が起き、僕の夏休みはあっちこっちを走り回るのにすっかり費やされてしまったのだ。

たしかに充実してたと言えなくもないけれど、僕だって十六歳の男子高校生である。高校生らしいことに時間を忘れるほど夢中になってめり込みたい。

九月に入って、その若い情熱は行き所を求めて暴れ回り、膨れあがり、そして爆発した。

……ゲームセンターで。

そもそも僕は、親が頻繁に転勤していたせいで、小学校でも中学校でも友達がいなかった。なんてことを書くとアリスに「親の転勤を責める前に、きみ自身がどれだけ薄情な人間か考えてみたらどうだい!」

と怒られそうだけれど、とにかく放課後ひとりでゲーセンに通い詰めるのが日常だった時期もあった。
　その病気（と称して差し支えないだろう）がおさまったのは、ひとつには対戦格闘ゲームのブームがしぼんでしまったためで、もうひとつには姉が小遣いの管理を行うようになったためである。金がなくなったのだ。
　つまり、けっして僕の中の火が消えたわけではなかった。戦場と燃料さえ与えられれば、必然的に、再び燃え上がるわけだ。
「とにかく、はまること間違いなしだ。藤島中将も始めろ」
　少佐にそう誘われ、その『パワープレイボール』というオンライン野球ゲームを始めたのは、二学期に入ってすぐのこと。ネットワーク展開されたアーケードゲームの常として、けっこう金がかかるのだけれど、四代目からもらった給料のおかげで財布はたっぷり潤っていた。
『パワレボ』（妙な略し方だけど定着してしまっていた）は、それぞれのプレイヤーがＩＣカードをつくって自分のチームを登録し、全国ネットで対戦するという内容。うまいアイディアだったのは、選手のデータ型式だ。よくある野球ゲームのように実在のプロ野球選手だけが登録されているわけではなく、任意の名前を入れると、その名前にふさわしいパラメータを持った選手が生まれるのだ。どうやらネット上に蓄積されたなんらかのデータをいじくって作成しているらしい。
　たとえばセナとかプロストとかシューマッハとか入れるとすさまじい俊足選手になる。プロゴルファーの名前を入れてみるとミート力やコントロールが高くなる。プロレスラーならパワーヒッター。政治家や芸

能人の名前を入力して出てくる選手パラメータの「それっぽさ」はネットで大いに話題になった。おかげで、野球にあんまり詳しくない客層も取り込めたのだ。漫画やアニメや他のゲームのキャラまでなんとなく納得できてしまうパラメータにして吐き出すのだから大したものである。もちろん野球選手の名前を入れれば、それらしいデータが出てくる。桑田が投げる前にボールに向かってぶつぶつ言ったり清原がデッドボールを喰らいまくったりするといった細かい癖まで反映されているのも評判を呼んだ。選手の能力に応じてきちんとコストがかかるので、イチローと落合と王と長嶋を打線に並べたりするような無茶な真似はできない。また、一般人の名前を入れてもそれなりの選手はできるので、自分を選手化して登録している人は多かった。

　画面上の選手はパターン化された顔のディフォルメキャラなのだけれど、ユニフォームにそれぞれ画像を貼り付けられるので、ネットを通じて広まるのに一役買った。僕のチームもこれで有名になったといっていい。ドラクエ1から9までのヒロインをレギュラーにして、自分で描いた各キャラクターの絵を貼って使っていたら、あっちこっちのブログやニュースサイトに取り上げられた（ちなみに、チームとしてはたいへん弱かった）。

「さすが藤島中将だな！　我がチーム『ドライブ・ア・フェニックス』の絵も頼みたい」

「まずその、色々問題のあるチーム名をなんとかしてください。僕の絵がそういうので広まっちゃうのはなんだかいやなので」

「なにが問題なんだ？　『フェニックスを駆る』という意味だぞ。もちろんフェニックスというのはF―14トムキャットに搭載可能なミサイルのことであって、審査で楽天に負けて誕生すらしなかったどこかの球団とはまったくなんの関係も」

「嘘つけよ！　少佐のとこのエースピッチャー、『堀江』じゃないですか！」

「株価のごとく急落するフォークボールが武器だ」おい、発言にもっと気をつけろ。「とにかくだな、不死鳥だから、神々しく、熱く、黄金色に輝く鳥のイメージだ」

親子丼の絵をユニフォームに貼ってやったら少佐は激怒した。熱々で黄色で鳥なのに！

＊

「最近きみは怠慢だよ。探偵助手の仕事をなんだと思っているんだい？」

九月半ばの金曜日、ついにアリスにも言われてしまった。ゲーセン通いのせいであまり顔を出していなかったせいだ。

「そうだよ藤島くん、アリスの髪のお手入れは本来は助手の仕事なんだから！　早くやり方おぼえてね。ああもう、だから、もっと柔らかくブラシかけるの、こうやって」

彩夏にも怒られた。僕らはそのとき三人まとめて探偵事務所のベッドの上で、アリスの長い黒髪を彩夏と半分ずつ受け持ってヘアケア講習の最中だった。僕のブラッシングにもトリートメントのなじませ方にも細かく彩夏のつっこみが入る。

「髪の手入れなぞ頼んだおぼえもないぞ」髪をいじられるのがきらいなアリスはむくれた。

「僕もできれば彩夏とヒロさんに任せたいんだけどな」

彩夏は僕のクラスメイトで、このビルの一階に入っている『ラーメンはなまる』という店でバイトをしている。アリスのあしらいにかけても、僕よりずっと器用なのだ。

しかし短絡思考気味な面があって、いきなりこんなことを言い出すから困る。

「でも将来、もっと大きい事務所に引っ越して、藤島くんとアリスで二人暮らし始めたときに困るでしょ？」

「な、なんでぼくがナルミとっ」

アリスが振り向こうとして、ブラシに髪を引っかけて悶える。耳まで赤くなっている。そんなに痛かったのか。いやそうじゃなくて。僕も彩夏を見る。二人暮らし？

「だってホームズとワトソンて一緒に暮らしてたよ。ポワロと大尉もそうでしょ。探偵と助手ってそういうきまりなんじゃないの？」

「だれだい彩夏に無駄な知識を仕込んだのは！　推理小説なんて読まないだろうきみは！」

「……僕じゃないからね？」海外ミステリは詳しくないし。
「ヒロさんが教えてくれた」
「彩夏、きみもそろそろあのジゴロとのつきあい方を考え直したまえ！　生まれてすぐに助産婦を口説いたみたいな男だよあれは！　まったく口を開けばろくでもないことばかり」
　両膝に手のひらをばしばしと打ちつけてアリスは怒る。僕だってびっくりしていた。アリスと二人暮らし？　いやもう色々な意味で無理無理。冗談でもやめて。彩夏もこないだまでアリスの迂闊さを叱る立場だったのに、どうしたってんだよ。
「アリスの教育方針をそろそろ変えようって、ヒロさんと話し合ったの。どうせ二人暮らしすることになるんだからそっち方面に」ならねえよ。なんの教育だよ。
「もうっ、ナルミ、きみは髪いじりなんて憶えなくていい」
　手の甲を引っぱたかれたので、ブラシを彩夏に渡して全部任せることにする。最初からそうすればよかった。
「いいかいナルミ、きみなんていなくたって、ぼくひとりでどうとでもなるんだからな！　きみの職務はもっかのところアイロン掛けだけだよ。肝に銘じたまえ」
「はいはい。わかってるよ」

アリスはここの自分の脱（ぬ）いだ服を他人に触（さわ）られるのが恥（は）ずかしいという概念（がいねん）を憶えて洗濯（せんたく）を自分でするようになったのだけれど、パジャマのアイロン掛けだけはまだ僕の仕事だった。アイロンに触るのが怖いのだそうだ。

「アリスどうしてアイロン怖いの?」とブラッシングを続けながら彩夏（あやか）が訊（たず）ねる。いつぞや、僕が使った直後のアイロンに触（さわ）っちゃって以来、トラウマになってるらしいのだ。

「熱で形状を矯正（きょうせい）しようというその短絡（たんらく）的な思想そのものがおぞましい。洋服に使うだけだからまだいいが、想像してみたまえ、人間の皺（しわ）をアイロンで伸ばそうなんて考える愚（おろ）か者が現れないとも限らないのだよ」

「あのねアリス、ヘアアイロンて知ってる?　髪（かみ）のお手入れにもアイロン使うんだよ」

　彩夏が耳元で囁（ささや）くと、アリスの黒髪が感電でもしたみたいに逆立（さかだ）った。その右手がベッド脇のサイドテーブルのキーボードに伸び、ネット検索（けんさく）結果がモニタのひとつに弾（はじ）き出される。

「……な、な、なんだこの機械はッ」

　ヘアアイロンの説明を読んでアリス絶叫。存在を知らなかったのか。妙（みょう）な知識はいっぱい溜（た）め込んでいるくせに、一般常識はからっきしなやつである。

「熱で髪をだとっ、どう見ても拷問具（ごうもんぐ）だろうこれは、このおぞましさに比べれば鋼鉄の処女（アイアン・メイデン）もマッサージ器に等しいよ!」

ヘアアイロンつくってる会社のみなさんごめんなさい。うちの探偵も悪気はないと思うのです。でもアリスは彩夏の手を振り払って、ぬいぐるみの山の中に潜り込んでしまった。尻が震えている。そんなに怖かったの？

「ナルミっ、今後はパジャマの皺処理にアイロンを一切使わないこと！　あんな恐ろしい機械は滅びてしまえばいい」

「アイロン使うなって……じゃあどうやんの」

「ぼくのパジャマの皺を一本一本手で伸ばす作業に、きみのつまらない生涯を費やせると思えば、じゅうぶんに幸せだろう」

「ふざけんな。僕だってやることがあるっての」

「ほう？　なんだい。言ってみたまえ」

面と向かって訊かれた僕は、はたと困ることになる。

「まさか学校の予習復習などといった片腹痛い嘘は口にすまいね。留年確定のくせに」

「う……僕だって！」思わず言い返してしまう。「放課後にスポーツとか、やってるんだぞ」

「どうせ『パワープレイボール』だろう」

「知ってたのッ？」

「ニート探偵は全知無能、ましてやきみはウェブ上で大人気の職人じゃないか。知らないわけがないだろう。肌色がやけに多い、いやらしいユニフォーム絵でしこたま稼いで、高給選手をずらりとそろえてるのに、

チームバランスが悪くて全然勝ててないことも知ってるよ」
「やらしくないよ！　そういう絵の依頼が多いからしょうがないんだよ」
　ほらほら事情を知らない彩夏が変な目で見てるからやめてくれないかな！
「え、えっと？　どういうこと？　藤島くん単位足りなくて卒業できないし働くのもいやだからエッチな絵描いて売る仕事にしたってこと？」
「もうどこからつっこんでいいのかわからない僕、絶句」
「絶句してないよ、口に出してるよ」
「ああっほんとだ」
「ていうか藤島くん基本的に全部ひとりごとで言ってるから。それで会話成り立ってるんだよ気づいてなかった？」
「……彩夏、真実は告げればいいというものではないよ。見たまえナルミの落ち込みぶりを。アスファルトの上で一夏過ごした蚯蚓のようじゃないか」
「い、いや、そこまで落ち込んでないけどさ」反論する僕の声は弱々しい。「彩夏にそれ言われるの二度目だし……」
　最初に指摘されたのは、『エンジェル・フィックス』の事件よりも前のことだ。つまり別々の人間二人から指摘されたのと同じである。ほんとは輪をかけて落ち込んでいた。忘れかけてたのに。もういいよ、一生他人と喋らずに済む仕事をして生きてくから。ほんとに絵描きで食っていこうかな。

「でもでも、お金とれるくらい絵が巧（うま）いんだから藤島くんすごいってことだよねっ？」
　彩夏の必死のフォローがかえって僕に追い打ちをかける。
「現実の金ではないよ、ゲーム内通貨だ」
　アリスが冷ややかに言ってキーボードを操作し、『パワレボ』のコミュニティサイトをモニタに表示させる。僕が出品したイラストがずらりと並ぶ。大半は売却済み。
「これ藤島くんが描いたの？　あれ？　見たことのあるアニメの絵ばっかりだけど」
　彩夏がモニタと僕の顔を見比べる。
「あの右上のやつなんて映画のポスターに使われた絵だよね。ネットでもあっちこっちで見たよ」
「ところがそうじゃない。このゲームにはね、そもそも既存（きそん）のフォーマットの絵を貼（は）り付ける機能なんてないんだ。メーカーが用意したツールで作成した絵しか使用できない」
　アリスが得意げに説明を始める。
「既存の画像を貼り付けられるようにしてみたまえ、とたんに著作権侵害の嵐（あらし）だよ。そこでメーカーは、たいへん貧弱な描画ツールのみを実装した。なんと、楕円（だえん）しか描けない」
「え、え？」
　彩夏は画面を指さして口をぱくぱくさせる。つややかな肌（はだ）がまぶしい水着の女の子の絵だ。
「つまり、メーカーの想像を超えて、この国の暇人（ひまじん）どもには無駄（むだ）な根気と技術が有り余っていたということだよ。楕円は角度と二つの径（けい）の長さを変えればどんな直線も曲線も描けるからね。描画過程も再生で

きるから見るといい」

　アリスがキーを叩くと、画面がまっさらになり、そこに様々な色と大きさの楕円形がぽつぽつと置かれて、やがて水着の女の子の絵になっていく。

「これは高速再生だから実際に完成するまでには三、四時間はかかっているだろうね」

　いえ、実は八時間かかってます。

「すごい……世の中、暇な人もいるんだね」

「そこの床にへばりついているぼくの助手が、まさにその暇な人だよ」

「ほっといてくれよ！」僕はベッドの端を殴って言い返した。アリスの冷たい視線に、彩夏のなまあたたかい同情の視線まで重ねられる。

「え、えっと、藤島くん、大丈夫」彩夏はもじもじしながら言う。「楕円だけで水着の女の子描くのも立派な仕事だよ」仕事じゃねえよ！　変ななぐさめ方はやめてくれないかな！

　そのとき探偵事務所のインタフォンが鳴って、救世主が現れた。少佐だ。

「藤島中将、ここにいたのか。今日も『GAMEにしむら』に出勤するぞ」

　僕はあわてて立ち上がってPCラックの段に頭をぶつけそうになった。GAMEにしむら、というのは僕らが主戦場にしているゲーセンだ。出勤ていうな。仕事じゃねえ。

「なんだい騒がしく入ってきたと思ったら」アリスが少佐をにらむ。「ナルミは今、探偵助手業務の真っ最中だよ。遊び相手は他をあたりたまえ」

「なんの業務だ？　アリスの髪の手入れは彩夏がしているように見えるが」

「ぼくにいじめられる仕事だよ！」

「少佐、行きましょうか」

僕は嘆息して、さっさと事務所を出た。

夕方になってビル群の向こうに陽が隠れると、アスファルトからにじみ出る暑気にわずかながらひんやりした風が混じる。探偵事務所のあるビルから駅までの通りは気の利いた店も少ないので、普段はあまり人通りはないのだけれど、この季節にはアイスクリームやクレープの屋台も出ていて少し活気づく。背の低いビルの向こうに、文化会館のずんぐりした影が見えてくると、人通りも増え始める。『GAMEにしむら』はその向かい、バッティングセンターの隣だ。左右から押し潰されそうな細長いビルの、三階までの窓にきらびやかなゲームのポスターがべたべた貼ってある。店頭のUFOキャッチャーの間に、いつものように客がたむろしているのも見える。

「少佐！　二階リニューアルしてレトロゲー入れたんだよ、見てくれないかな」

僕らが店に入るなり、そう言って奥から出てきたのは、おどおどした感じの眼鏡の若いお兄さん。西村さんといって、その名の通りこのゲーセンの店長だ。オーナーであるお父さんが病気で長いこと入院中なので、この若さで経営を一手に任せられているのだという。

「ほう、見せてください」

ここ最近、西村さんからゲーム通としての意見を求められてえらそうなアドバイザー顔の少佐、二階の奥の一角をざっと見渡して激怒。

「こんなラインナップでレトロゲーをそろえたなどと胸を張られても困ります！」

「そ、そうかな？」

「シューティングの有名どころなんざ、若い者は見向きもしないしレゲーマニアにとっちゃありきたりすぎて全然食指が動きませんよ。まずボンジャックとリブルラブルを入れてください、話はそれからです」

「う、うん、わかった」おい、言われた通りにするのかよ。

しかし西村さん、夏休み中よりもさらに老け込んで顔がくたびれきって見える。一階の大型筐体ゲームのコーナーはまだしも、二階と三階にはあまりお客が入っていないみたいだし、そうとう苦労しているんだろう。

「この夏休み、『パワレボ』を六台に増やしたんでしょう。それでも厳しいんですか」と少佐が訊ねると、西村さんは肩を落とす。

「いい材料は大型オンラインゲーだけだね。他はもう悪い話しかないよ」

オールドゲームの群れを見渡して、西村さんはため息をついた。
「メーカーさんはどこも新作入れろってしつこいし、直営店でがっつり値下げされると、うちも下げないわけにいかないし……期待作もすぐ家庭用で出ちゃうしねえ。『パワレボ』も移植されるっていうから、お先真っ暗だよ」
「まあ、ゲーセンの時代は家庭用ハードとネット環境の進化によって終わったと言っていいでしょうね」
「ちょっとちょっと少佐」はっきり言い過ぎだよ！　西村さん、泣きながら筐体の画面の拭き掃除を始めてしまう。
「バイトもすぐやめちゃうしさあ。隣のバッティングセンターも畳んでただろ」
　そういえば、がらんとしてたと思ったら潰れてたのか、あそこ。
「うちの店も冬まで保つかどうか……」
「そ……そんなにやばいんですか」
　いつも遊びに来るたびに、『パワレボ』は満員御礼で並ばなきゃ遊べないほどなので、全然そんな心配してなかった。でも考えてみれば、あれって床面積あたりの売り上げはあまり高くないのかもしれない。
「店長、ゲーセン歴三十年の自分から一言いいですか」おまえはこないだ二十歳になったばかりだろうが。椅子にふんぞり返って足を組む少佐、めちゃくちゃえらそう。でも西村さんは床に膝をついて、「なんでも言ってくれよ」と神妙に聞く姿勢。
「ゲーセン経営の最も大事な点は、ゲーム好きのマニアックな意見を気にしないことです」

「ゲームマニアが自分で言うなよ！」

「しかしな、藤島中将」がらんとした二階フロアを手で示して少佐は言う。「マニアというのはけっきょくのところ偏愛者だ。文句を言いながらもゲームから離れない。しかし一般人は他に人生の楽しみがたくさんあるんだ。ゲーセンがつまらないと思ったら黙って立ち去るだけだぞ。我々の言う通りにこの店を造りかえていったら、まずUFOキャッチャーが消え、メダルゲームも消え、歴代の格闘ゲームが無駄に並び、売り上げはさらに落ちる」

「そりゃまあそうですけど」

「じゃあどうすりゃいいのかなあ……」と西村さんも少佐の隣に腰を下ろす。

「そもそも店長、なんでこんな斜陽の商売続けてるんです？」

　さっきから少佐の舌鋒は容赦がない。あんたも僕もこの店なくなると困るだろ？

「親の店だしさ。俺もゲーム好きだったから、自然と、なんかこう」

「自然となんとなく続けられるような商売じゃないですよ。いいですか、今のゲーム業界は一年単位でビジネスモデルが進化しているといっていい、その中でアーケードゲームだけは昔ながらの百円玉頼みを――」

　少佐の長広舌が始まったので、僕はさっさと一階に下りた。『パワレボ』の、巨大なパチンコ玉みたいな筐体のまわりに人だかりができている。

「ナルミ！　少佐もさっき来てただろ、なにやってんだよ、そろそろ都内レベルのオープン戦エントリ始まるぞ」と、大学生のゲーム仲間が僕に気づいて手を振ってくる。
「全員モー娘のチームは完成したのか？」と言ってきたのはべつの高校の、たぶん三年生。ゲーセンで知り合った仲なので、実は名前を知らない。
「いや、あれほんと弱くて……絵はできたけど」
「いいから出せよ、だれもナルミのチームに実力なんて求めてねえよ」
　大笑いの中で、僕は背中をどつかれて筐体に押し込められる。パーソナルカードをリーダに嚙ませると、あっというまに対戦組み合わせが決まる。３６０度モニタに東京ドームのまぶしい緑が浮かび上がり、「おい相手は全員ジャニーズだぞ」「これならモー娘でもなんとか相手になるだろ」「待てよ中居は野球オタだからかなり強いぞ」「おい、森もいるじゃねえか。レーサー扱いで走力めちゃ高い」「さりげなくキムタクが野球選手の方じゃんか！」とギャラリーが沸き上がる。僕はタッチパネルでスタメンを選びながら、腹の底にたまっていく熱を感じる。たしかに斜陽の産業かもしれない。それでも僕がこうしてゲーセンに足を運ぶのは、実にこの熱さのためだ。

　それから数時間、僕らは『パワレボ』にコインを注ぎ込み続けた。途中から少佐も参戦、ペナントレースの四月分を消費したところで蛍の光が流れて閉店を告げる。

「明け方まで営業するように店長にかけあってくる！」
ちっとも勝てずにいらだった少佐（しょうさ）が、筐体（きょうたい）から転げ出てそんなことを言い出すので、あわてて止めた。
「さっき自分で言ったこと忘れないでくださいよ！」
「あれは一般論のアドバイスだ。それはそれ、これはこれ。自分の欲望に忠実に、わがままを言うのも客の役目だ」
わがままってわかってんだったら自重（じちょう）しろ。ていうか深夜営業なんてしたら営業許可取り消されるっつうの。ところが少佐は、他（ほか）の客がみんな帰ってしまった後の無人の店内を大股（おおまた）で横切ってバックルームに向かう。
「だめですよ、西村（にしむら）さんだって忙（いそが）し──」
バックルームの、少しだけ開いた扉（とびら）の向こうから荒っぽい声が聞こえてきたのは、ちょうどそのときだった。
「……あんたもそろそろ自分の将来考えたらどうです、こんな店に未来ありませんよ。メーカーが決算期前にどれだけ店をいじめるか、思い知ったでしょう？」
「こっちだっていつまでも好条件出してると思うんじゃねえぞ」
僕と少佐はつんのめるように立ち止まって、思わず顔を見合わせた。どすの利いた、二人分の男の声だ。その間に、西村さんの萎（しお）れた声が挟（はさ）まる。
「……いやあ、そうは言っても私の独断じゃあ」

「なんなら、わたくしどもがお見舞いがてら病院にご挨拶に行ってもいいんですよ」
「い、いや、やめてください、親父はほんとに具合がよくないし、あまりショックなことを」
「ならあんたが今ここで決めりゃいいだろうが！」
　僕はバックルームのドアに近寄ろうとして、足で椅子を引っかけてしまう。筐体のひとつにぶつかって、思いがけず大きな金属音が響いた。少佐がぎょっとしてこっちを見る。
　ドアが勢いよく開いた。出てきたのは、黒スーツに淡い茶色のサングラスという大柄の若い男。襟元にのぞく赤Yシャツにしっかり柄が入っている。
「なに立ち聞きしてンだガキが！」
　僕も少佐も後ずさる。
　赤Yシャツの向こうで、もう一人、白っぽいスーツの中年男が、事務机に腰掛けて行儀悪く片膝を立て、椅子に縮こまった西村さんの肩に手を置いている。
「あ、す、すみません、でも」
　僕はその二人と西村さんの顔を見比べる。
「なんでもないよ、その、仕事の話だよ、ほら二人とも早く帰って」
　西村さんが作り笑いで言った。赤Yシャツが舌打ちして僕らをひとにらみし、ドアを叩きつけるように閉じた。

白々しい蛍の光が、僕らの頭上で延々とリピートを続けていた。

✻

翌日の放課後、『ラーメンはなまる』に顔を出したら、勝手口前のスペースでテツ先輩が冷やし中華をすすっていたので、さっそくその話をしてみた。

「やくざだろ、それはどう見ても」と先輩は即座に言う。

「……ですよねえ、やっぱり」

僕は鞄を下ろして、テツ先輩の向かい側の重ねた古タイヤに腰を下ろした。まだ残暑厳しく、夏服が汗で背中に張りついている。まるで昨日のあの二人組の記憶みたいに。

都内でも有数の繁華街がすぐそばにあるので、単純に柄の悪い連中ならば毎日のように見かける。でも、僕にはわかった。昨日のあの二人は、ほんものだ。そんなの判別できる嗅覚なぞ要らないのだが、それでも暴力団関係者と何度もやりあった僕には見分けがついてしまう。

「でも、なんで西村さんがやくざなんかにからまれてんの？　やばい業者から借金でもしちまったのかな」

「かもしれませんけど」

だいぶ経営やばそうな話してたし。でも、漏れ聞こえた内容からして、もう少し複雑そうな事情がありそうだった。好条件がどうのこうのとか言ってたし、やくざの方からなにか持ちかけてたんだろうか。

とにかく、僕も少佐も、情けないことにそのまま西村さんをほっておいて逃げてきてしまったのだ。もちろんあの場に居残ったって要らないお節介だったのだろうけど、やっぱり後味は悪い。

「そんで今日は少佐は?」

「心配だからってんで開店直後から『GAMEにしむら』に行くって言ってました」

もう四時だから、事情を聞けたのなら、そろそろこっちに顔を出してもよさそうだけど。

「西村がどうしたって?」

勝手口が開いて顔を出したのは、開店準備中だったミンさんだ。いくら暑くて客がいないとはいえ、タンクトップなしでさらしを巻いただけなのはまぶしすぎて、正直どうかと思う。

「いよいよ潰れそうなのか、あいつの店。最近、飲みにも全然顔出さなかったしなあ。あっちこっち金策に駆け回ってたみたいで」

「ミンさんの耳にも入っちゃうくらいやばかったんですか……」

西村さん、実はミンさんの高校のときの同窓生なのである。岡林商店の友造さんともども、家が近くてなおかつ、高卒で親の店を継いだ者どうしということで、今もよく飲んでいるのだそうだ。

「高校時代から、ゲーセン経営のかつかつっぷりはよく聞いてたからな」と、ミンさんは渋い顔をする。

「なあおい、ゲーセンて借金するほど資金必要なのか?」

テツ先輩が空になった丼を台の上に置いて、ミンさんの顔を見た。
「必要にきまってんだろ。ニートにゃわかんないかもしれないけどな」
ミンさんは心底あきれた口調で答えた。
「ゲーム機、新作だと百万単位でかかるんだぞ。おまけに人件費と光熱費。暇なガキからかき集めた百円玉なんてほとんど吹っ飛ぶ」
「たしかに俺が学生だった頃よりだいぶゲーセン減ったよなあ。みんな店畳んじゃって」
「やくざなんかに金借りるくらいなら、店畳んだ方がいいと思うけどな……」
ミンさんがそうつぶやいたときだった。
「いや、あの、連中に借金してるわけじゃないよ」
路地の入り口で声がして、僕らが一斉にそちらを向くと、ひょろりとした人影がビルの間に立っている。
「西村!」ミンさんが目を丸くした。「おまえ店はどうしたんだよ」
「あー、うん、少佐がかわりにちょっと店番してくれるっていうから」
僕らは開店前のラーメン屋に入り、五つしかないカウンター席の半分を埋めて厨房のミンさんと向かい合う。
「うちのビルの四階に、組事務所が移ってくるらしくて」

「なんか因縁つけられたのか」とミンさんがネギを刻みながら目だけをちらと上げる。

「うん。うちの店追い出してパチンコ屋にしたいらしくて。出ていかないならみかじめを払えって言ってきて」

「民暴じゃないか」ミンさんがいらだたしげな手つきでネギをタッパーに流し込む。「そんなのいまどき警察に言えばすぐになんとかするだろ」

「それが、そう単純な話でもなくてさ……」

　西村さんは渋い顔をして、柔らかい天然パーマの髪をかき混ぜた。

「俺の親父とビルのオーナーが知り合いで、家賃かなり安くしてもらってたんだ。それでなんとか経営できてたんだけど、オーナーがその組にだいぶ借りがあるらしくて、だから、名目上はただの賃上げになるんだ」

「それでオーナーがやくざに賃上げ分をそのまま払うってことですか」とテツ先輩。

「うん、たぶん……」

　迂回集金されてしまうと、そのビルのオーナーさんが声をあげない限りは、民事介入暴力だと証明できないわけだ。最近はやくざもかなり頭を使ってくる。

「それでどうすんの」

「どうしていいかわからなくて、それで少佐に言われて花田んとこに相談に来たんだけど」

「だから、おまえがどうしたいか訊いてんだよ。店、続けるつもりなのか？」
「店畳んでパチンコ屋に鞍替えしたら、迷惑料も払うし、俺に店長任せるってやくざが言ってるんだ……」
　あのとき言ってた『好条件』てのは、それか。
「え、じゃ、じゃあ、『GAMEにしむら』は潰れるんですかっ？」
　僕は西村さんの腕をつかんで揺さぶっていた。僕らの大切な球場なのに。
「それでどうしようかなって……」
「はっきりしねえやつだな」
　ミシンさんがまな板をどんと叩いた。西村さんは椅子の上でびくっと縮みあがる。
「ナルミ、とりあえずアリスんとこ連れてけ。そのやくざとかオーナーとかのことも、調べといて損はないだろ。わたしは昔からこいつのこういうはっきりしないところを見てると、殴りたくなるほど腹が立つんだ」
「いや待てよマスター」テツ先輩が横から言った。「アリスになにさせようってんだよ。西村さんがどうしたいのか決めてないのに。あいつは自分から同情したり正義の味方ばりに怒ったりして動くようなやつじゃないぞ」
「ん……む……そうか」

ミンさんは腕組みする。僕ら三人の視線は、真ん中の椅子でしょんぼりした眼鏡店長に自然と集まった。西村さんは首をすくめてつぶやく。

「俺は、ええと、その、とりあえず話聞いてもらえたらなってくらいで……まだどうしようかなんて全然……」

みるみるミンさんの目がつり上がり、手も持ち上がる。

「だめですってばミンさん包丁持ったまま！」

あわてて僕は立ち上がって止めに入る。

西村さんが逃げるように店を出ていった直後に、テツ先輩がそれに気づいた。

「なにやってんだ、そんなとこで」と、カウンター越しに厨房の端――勝手口のドアに向かって言う。それで僕もミンさんも気づいた。ドアが細く開いて、小さな人影が見える。ミンさんがさっと歩み寄ってドアを押し開くと、「わ、わ」と両腕を振り回してあわてるアリスのパジャマ姿が見えた。

「このクソ暑いのに、なんで下りてきてんだ」

ミンさんは、のけぞって倒れかけたアリスの腕をつかまえて引っぱり起こす。

「ナルミがなかなか依頼者を連れてこないからだよ」と、アリスは頰をふくらませる。

「え、え？」

僕はカウンターから身を乗り出して、勝手口の向こうのアリスを見つめる。

「GAMEにしむらの店長がなにか困りごとでやってきたのだろう、防犯カメラでみんな見ていた。ナルミ、どうしてさっさとぼくのところに連れて——」

厨房に入ってきて店を見回したアリスは、途中で言葉を呑み込んだ。珍しい。困惑した目が僕とテツ先輩の間の空隙をさまよう。

悪い予感がしたけど、おそるおそる教える。

「……西村さんなら、帰っちゃったけど」

「なっ」アリスの顔が紅潮する。「なら、なおさら速やかに事務所に来たまえよ!」

「とっとと上に連れてけナルミ」ミンさんがため息混じりに言った。「人並みにひとりが寂しいなら、ひきこもりなんてやめて外にもっと出るようにすりゃいいんだ」

「だれが寂しいだなんて言ったんだいっ」

「ほらアリス行くよ、顔色悪いし」広所恐怖症なんだから無理するなよ。僕は勝手口に回ると、ぴいぴい暴れる探偵の肩をつかんで階段へと引きずっていった。

✻

翌日は土曜日で学校が休みだったので、僕は少佐（しょうさ）と午前中から『ＧＡＭＥにしむら』に行った。テツ先輩にも頼んで一緒（いっしょ）についてきてもらった。万が一の暴力沙汰（ざた）を考えると心配だったし、先輩も「しばらく顔出してなかったしなあ、久々にパンチングマシーンの記録更新（こうしん）すっかな。どうせまだ俺（おれ）の記録残ってるだろ」なんて快諾（かいだく）してくれた。パンチングマシーンなんてインカム悪くてとっくに撤去（てっきょ）されちゃいましたよとは言えなかった。

休みの日は開店直後から『パワレボ』に行列ができている。

「なんだよ。儲（もう）かってんじゃん」

店の入り口でテツ先輩はのんびり言って、一階を埋（う）める人垣（ひとがき）を見渡す。

「客が入っているのは大型の通信対戦ゲーだけですよ」

少佐は『やれやれこれだからゲーセン素人（しろうと）は困る』とでも言いたげに眉（まゆ）を寄せた表情で首を振って言う。

「二階三階には全然入っていません」

「なら、三階まで全部この野球ゲームにすれば」

「それもゲーセン経営の素人がやって失敗する典型的なパターンです。言っちゃ悪いですが、こんなの一過性のブームですよ。『パワレボ』なんて追加要素の発展性に乏（とぼ）しいですからネットでの話題の盛り上がりが一段落したらそれでおしまいでしょう」

聞いててすげえ腹立つんだけど。内容はともかくとしてその口調がもうね。

「このしょぼい店にどうして一定数の常連がついているかというと、『パワレボ』リリース直後でまるで流行ってなくて巷間の評価も野球ゲーなんていまどき当たるわけがないだろって頃に、店長がゲームショウで見惚れたって理由だけでほいほい四台も導入してしまったからです。当初、この店でしか『パワレボ』ができなかったから、みんな集まった。その初動の勢いがなんとなく続いているってだけなんですよ」

　そうだったのか。それは僕も知らなかったよ。

「ブームがしぼんだとき、三階まで全部『パワレボ』だったら客はあっという間に離れます。そして一度来なくなった客をもう一度呼び寄せるのはゲーセン側の努力ではできません。なにか爆発的なヒット作が出るまで閑古鳥で待っていたら潰れます」

「なんだそりゃ。努力が無駄？　じゃあその、少佐がえらそうに言ってるゲーセン経営ってのはいったいなにを目指しゃいいんだよ」

「客を減らさない努力しかできないってことですよ」

　思わずうなずいてしまった。なるほどね。せつないけど説得力がある。

「そんじゃ、少佐とかナルミとかはなんでこの店に通ってんだ？　他にもこのゲーム置いてるとこはいっぱいあるんだろ。ナルミなんて学校のそばにいくつか」

「うーん？」僕は腕組みしてしまう。そういえば、どうしてだろう。他の店でプレイしようという気は起きない。

「少佐なんて口開けば西村さんの悪口じゃんか。なら他の店でいいだろ」
「しかしですねテツさん」
少佐は、彼にしては珍しいくらい柔らかい表情で答えた。
「日本でいちばんたくさんタイガースの悪口を言っているのはだれだと思います？　考えるまでもなく阪神ファンですよ。テツさんだって『はなまる』のラーメンを不味い不味いと言い続けながら、もう何年通ってます？」
「ああ、うむ……」
「つまりそういうことですよ」
少佐がぴんと指を立てて言ったとき、店の奥の方で何人かの順番待ちギャラリーが僕らに気づいて手を振ってきた。
「少佐、ミニリーグのセリーグ枠が一つ空いてるぞ！　打てる投手九人のチーム作ったんだろ、早くエントリしろよ！」
「ナルミも来てんの？　こないだ言ってたRPGの設定資料集買ったから、それでユニフォーム絵描いてくれよ」
「少佐のとこのリリーフ陣、三人貸してくれよ、大阪のやつらが最近のさばってて」

僕は笑って手を振り返し、少佐の背中を追いかけ、人混みを掻（か）き分けて、大きな銀球の筐体（きょうたい）が置かれた店の奥へと泳いでいく。つまりはそういうことだ。ここは、なんとなく居心地（いごこち）がいいのだ。僕らがいて、みんながいて、球場がある、ただそれだけで。

そうして晴れの日も雨の日も、ときにどれほど文句を言いたくなることがあったとしても、僕らはここに帰ってくる。そういう場所のことを、僕らはホームと呼ぶわけだ。

ほんの一プレイでいいから、と筐体（きょうたい）のまわりの列に並ぼうとした少佐（しょうさ）を引きずって、バックルームに向かった。僕がノックしようとしたとき、ドア越しに、店内BGMにも負けないくらいのだみ声が聞こえてきた。

「いつまでもこっちが下手（したて）に出てっと思うんじゃねえよ！」

「西村（にしむら）さん、あんたねえ、だんまりはだれも幸せになりゃしませんよ？　どうせ来年にゃ賃貸契約切れるんだ、そしたらあんたは放り出される。こっちは善意で提案してんだ」

僕と少佐は、はっとして顔を見合わせた。あの、やくざ連中の声だ。今日は真っ昼間（まっぴるま）から来てるのか。どうしよう、まさかいきなり鉢合（はちあ）わせするとは思ってなかった。

「……やつらか？」と、背後に寄ってきたテツ先輩が囁いた。僕がうなずくなり、ドアに手を伸ばす。止めに入る間もなかった。先輩はドアを押し開いて中に踏み込んだ。

　狭いバックルームの中の空気が軋んだ。事務机の前に縮こまった西村さんも、それを前後から挟んで責めていた二人のやくざも、一斉にこっちを見た。

「ンだてめえ」

　若い赤Yシャツの方がテツ先輩に向かって凄んだ。

「西村さんの顧問弁護士だよ」先輩は涼しい顔で嘘をつき、二歩三歩と中に踏み込む。

「ちょ、ちょっと待ってテツ、だめだってば」西村さんがあわてた。「今、取り込み中」

「だから来たんですよ。西村さんひとりじゃどうしようも——」

　テツ先輩の言葉は途絶えた。二人のやくざでも、西村さんでもなく、部屋の左手奥の方を見て固まっている。どうしたんだ？　僕は先輩の大きな背中に視界を遮られていたので、そうっと上半身だけを部屋の中に入れて様子をうかがう。

　部屋の奥、積み上げられた基盤や空筐体や掃除用具の間、パイプ椅子にふんぞり返っていたもうひとりの人物と目が合って、僕は声をあげそうになった。

「なんや、テツやないか。お？　ナルミもおるんか」

アロハシャツがはちきれそうな巨体、頭髪も眉毛もつるつるに剃り上げた異形、ひさしの深い眼窩にぎょろりとした濁り眼。

「ネモさん……」とテツ先輩がうめく。

僕も憶えていた。このタコ坊主面は、忘れようったって忘れられない。このへんを根城にしているやくざの幹部で、テツ先輩の麻雀仲間。これで逢うのはもう三度目、勘弁願いたい腐れ縁だった。

タコ坊主はぼろぼろの歯を剥き出しにして、にたりと笑った。

「ややこしい話になりそうやな。店長、ここは大勢で話し合うにはちょぉ狭すぎるで」

「え？　あ、は、はあ、そ、それじゃ閉店後に」

「アホ抜かせ。わしぁそない暇やない。今すぐ店閉めぇや」

「え、え？」

目を白黒させる西村さんの前でタコ坊主は立ち上がると、事務机の正面の壁――分電盤に手を伸ばした。

「ま、待ってください、なにす――」

ばちん、というブレイカーが落ちる音に、僕は思わず首をすくめて目をつむった。アキレス腱が引きちぎられたみたいな気分が襲ってきた。

「おい」「なんだよ！」「停電？」「ざけんな試合中だぞ！」

扉の向こうから大勢の怒声がして、僕は目を開く。暗い中、乱れきったいくつもの足音、椅子が倒れる音まで聞こえてくる。汗がどっと噴き出てきたのが、冷房が切れたせいなのか動悸のせいなのかわからない。

「……な、根本さん、なにするんですか」

弱々しく抗議する西村さんを押しのけ、タコ坊主は僕とテツ先輩との間を通ってバックルームから出た。

「停電やから、今日はしまいや！」

大混乱の店内が、その大音声でぴたりと静まる。

「そら、さっさと帰りや。店じまいや」

タコ坊主が低い声で告げた。『パワレボ』に興じていた連中は、禿頭のただならぬ風貌を見て青い顔で後ずさったけれど、離れた場所にいた客たちはタコ坊主の姿が見えなかったのだろう、不満の声をあげた。

「なんでだよ」「おい、プレイ中だったんだぞ」「金返せ――」

「根本さんお願いします、お客さんに迷惑だけは」

西村さんが泣きそうな声でタコ坊主を引き留めようとしたとき、タコ坊主の丸太みたいな腕がすさまじい勢いで持ち上がり西村さんの鼻先をかすめた。

があん、というすさまじい音が響き渡り、客たちの怒声を踏み潰した。僕の喉で吐息がこわばるのが感じられた。タコ坊主の拳が『パワレボ』の銀色の筐体にめり込んでいる。細かい亀裂が放射状に走り、小さなクレーターがそこに生まれていた。

恐怖のあまり喉を鳴らす音の他、だれも声をたてなかった。

「二度言わすなクソガキどもが」

タコ坊主の声は流し込まれた冷たいセメントみたいにゲーセンの床を覆い尽くす。

「帰れゆうとんのや」

タコ坊主の巨体の肩越しに、ぞろぞろと店を出ていく客たちを見つめながら、僕はいつだったかテツ先輩が言ったことをどうしようもなく思い出していた。

この世にいいやくざなんていない。

鈍い音がして、振り向く。白目を剥いた西村さんが『パワレボ』の筐体に倒れかかり、床にずり落ちようとして、タコ坊主に襟首をつかまれたところだった。失神している。

「情けないやっちゃな。おい、これ奥に寝かせとけ」

赤Yシャツの若い手下に向かって西村さんを放り投げるタコ坊主。あわててバックルームに戻ろうとした僕は腕をつかまれる。

「じぶんらは話があるんやろ。ええからこっち来い」

他(ほか)に客のいなくなった暗い店内で、タコ坊主は白スーツの部下を背後に従えてゲーム機のひとつにどっかりと腰(こし)を下ろし、僕らと向かい合った。
「ほんで、テツとナルミは店長とどないな関係や。なにしに出しゃばってきたんや」
テツ先輩は返答に迷って腕組みした。僕はバックルームで寝込んでいるはずの西村さんが気になってしょうがない。
「ゴーグルちびもや。また軽い気持ちで首突っ込もうてか。ちゃんと小学校行け」
タコ坊主は少佐(しょうさ)のヘルメット頭をぽんぽんと軽く叩(たた)いて言う。その言葉が、なにか少佐のスイッチに触(ふ)れてしまったらしい。
「大学生ですッ前にも言ったでしょうッ」
頭四つ分くらい高いタコ坊主の顔に、威勢(いせい)良く学生証を突きつける少佐。こっちは見ていてはらはらである。
「ほう、そやったか。おー、ええ大学通っとるやないか。くだらんゲーセン通いなんぞせんで、真面目(まじめ)に勉強して就職せえ。こないな無職どもとつきおうとってもろくなことないで」
待て、テツ先輩の次に僕を見るな。僕も高校生です。
「あいにくと自分は就労意欲というものがないのです！」
少佐、大いばり。タコ坊主は笑うんだけど、後ろに控えた部下が思いっきり困惑(こんわく)顔。

「大学にはのんべんだらりと八年間通い、この学生証の恩恵をたっぷり吸い尽くしたところで首席の成績で卒業すると見せかけて四回生の二月に中退、在学中からアプリで稼いだ資金でもってゲーム会社を設立、部下どもにちょいちょいと指示するだけで業界トップにのし上がってフォーブズやプレジデントに『日本版ビル・ゲイツは全然働かない』などと書きたてられるようになり、生涯遊びのことだけ考えて暮らします」

「あんたの夢みたいな人生はどうでもいいから」と僕は思わず背後から少佐をひっぱたく。

「だから、くだらんゲーセン通いではないのですよ！」

　少佐の弁舌は止まらない。なまじタコ坊主がフレンドリーな面を見せちゃったせいである。こうなったらしばらくほったらかして喋らせるしかない。

「ただの遊びじゃありません。クリエイターとしての業界リサーチです」

「嘘つけよ」なにがクリエイターだ。でも少佐は僕のつっこみを完全無視。

「店長がどう考えてるか知りませんが、この店は我が未来の礎です。いずれ七十階建ての本社ビルが屹立する日がくるまでは、カリスマCEOこと向井均少佐が通っていたゲーセンとして伝説になり続けてくれなければ困る」

「困るのは西村さんだよ！」

「……で？」

　タコ坊主の目がすうっと細くなる。

「自分はこの店のことならなんでも知っています。だから店長の代理として交渉しに来たわけです。テツさんはただの用心棒、藤島中将はただの荷物持ちです。さて」
少佐はタコ坊主の正面に椅子を引きずってきてきちんと向かい合わせに座った。
「家賃250パーセント上げは法外です。経営が維持できません。値下げ願う以外に選択肢はないわけです」
「待って少佐、そんな、西村さんが寝てる間に勝手に話進めちゃあ」
「勝手とはなんだ、だれの店だと思ってるんだ！」
「西村さんのだよ！」
タコ坊主はのけぞってげらげら笑った。後ろに控えた部下が、心配そうな顔になる。
「……伯父貴、このガキどもいったいなんなんスか、馴れ馴れしく」
白スーツが耳打ちすると、タコ坊主は僕らの顔を順繰りに見ながら肩越しに答えた。
「田原組がイワされた件、聞いとるやろ。やったんはこいつらや」
白スーツの顔が固くなる。
「それに、あの古着屋、『エラン・ガバ』の話ねじ込んだんもこのガキや。憶えとき。そこらのチンピラよりよっぽどなにやるかわからん。わしぃらも借りがある」

僕はぞっとしてしまう。そう、詳しく話すと長くなるが、あの古着屋の件でもめたときもこのタコ坊主が相手だった。最終的には僕が口八丁で丸め込んだんだけど、ええと、その『借り』というのはまさか、反語的な表現の方のあれなのでしょうか？

「あの古着屋、今はごっつう稼いどるで。結果的にゃ、ナルミの吹いた絵図があたったわけや。世話になったわ」

「は、はあ」

僕はうつむいてしまう。やくざには、貸しも借りもつくってはいけない、というのが、何度も学びながらも一度も生かされていない教訓のひとつだった。

「そやから話は聞いてやらんでもないわ。家賃はいくらまでなら払えるんや」

「こちらの手の内を晒すわけないでしょう。もちろんこちらの要求はこれまで通りの賃上げなしですよ」

「おおー、いいぞぉ少佐やったれやったれ」

テツ先輩、なんかもうめんどくさくなってきたのか、筐体に寄っかかって応援を始める。

「よう吹くなあ、ガキどもが。なにが交渉や。話にならへん」

タコ坊主がちらと牙をのぞかせる。止めに入る人間は、もう僕しかいないみたいだった。そう思って腰を浮かせたとき、タコ坊主が身を乗り出して言った。

「したら、賭けるか」

「……え？」

　僕は思わずタコ坊主の禿頭をまじまじと見つめていた。

「ギャンブルや。じぶんらも好きやろ」

「大好きです」「賭けるっつうとなにをどう」少佐とテツ先輩が同時に目を輝かせた。相手がやくざだってわかってんのおまえら？

「じぶんらが勝ったら、家賃据え置きで契約も切らんといたる。わしらが勝ったら無条件で即刻出てけ。どや」

「悪くないですね。なにで勝負するんです」

「そらもちろん麻雀」

「よっしゃ乗った！」テツ先輩が嬉しそうに腕まくり。

「待って待って先輩！　あんた麻雀弱いでしょうツキ頼みじゃないですか」

「ならナルミが少佐と」

「いやですよ、牌の流れに竜脈がどうのとか孔明の兵法がどうのとか言ってるような人と組みたくないです！　ていうか勝てるわけないでしょう、普段から万単位のレートで打ってる人たち相手ですよッ」

「負けても店長が困るだけだし、いいんじゃね？」

「いいわけないでしょ！」

「べつの種目でええで。星占(うらな)い勝負とかどうや」
「どうやって勝負するんですかそれ」
「そらもちろん、強そうな星座のやつが勝ちや」
「自分は乙女座(おとめざ)なので車田正美(くるまだまさみ)的には最強です」
「おっと、俺(おれ)は射手座(いてざ)だぜ」
「わしはやくざ」
「そのネタはもういいです、あんたら全員そうでしょ！　真面目(まじめ)に考えてください！」
「したら、じゃんけんでもええわ」
「どうせ薬指までエンコ詰めした人を連れてきてチョキかパーかわからないようにする作戦でしょうっ」
「藤島中将(ふじしまちゅうじょう)、なんか知らんが舌好調(ぜっこうちょう)だな」「ナルミ怖(こ)ぇえ」「じぶん、なくてええ才能ばっかあるんやなあ、ほんま」三人そろって感心されちゃったよ！
　肩(かた)を怒らせて前に出ようとした白スーツやくざを押しとどめ、タコ坊主(ぼうず)は言った。
「ほんなら、じぶんらの得意種目でもええ」
「……得意？　というと」少佐(しょうさ)が首を傾(かし)げる。
　タコ坊主は、『パワレボ』の巨大な球形筐体(きょうたい)を指さした。
「野球でどや」

「いいんですか。ルール知ってるんですか?」少佐が顔を輝かせて訊き返す。

「当たり前や、やくざなめんなや」

　意外だった。こんないかついタコ坊主がオンライン対戦ゲームなんてやるの?

「いいでしょう、種目はそれで決まりです」

　少佐は力強くうなずく。僕も異論はない。これなら勝てるんじゃないの?　どうして相手がこんなサービス精神あふれる申し出をしてきたのかはわからないけど。

「ほな一ゲームで決まりでええな?」

「かまいませんよ」

「条件、確認するで。そっちが勝てば家賃も賃貸契約もこれまで通りや。わしらが勝ったら、なんも言わんと即刻──ああ、即刻は無理やな、そう、一ヶ月以内に店畳んで出てけ」

「承知しました」

　このとき、もう少しよく考えてみるべきだったのだ。でも少佐とタコ坊主の間であっというまにまとまっていく話にずっと気をとられていて、僕は全然気づかなかった。

　僕らがだまされていたことを。

「話は決まったわ。ほな、撤収や」と、タコ坊主は白スーツに言う。それからバックルームに向かって「戻るで!」と怒鳴る。赤Yシャツも姿を現した。

「……い、いいんですか伯父貴、こんな甘い話にしちまって」と白スーツはまだ不安げ。

「かめへんわ」
「帰るんですか？　今すぐここで勝負でもこっちはかまいませんよ、ギャラリーがいないのは残念ですが、真剣勝負には好都合だし」
少佐は自信たっぷりの笑みを浮かべながら自分のパーソナルカードを取り出して、銀色の丸い筐体をあごでしゃくって指した。
ところがタコ坊主はにやりと笑い返して答える。
「今すぐは無理やろ。球場の手配せなあかん。川原のグラウンドでええな？」
「……グラウンド？」
少佐の顔が呆けた。
たぶんそのとき、僕も同じような顔をしていただろう。
「せや。じぶんらも四人しかおらへんやんか。九人おらな野球はでけへんで」

＊

翌日の日曜日は、もうたいへんな騒ぎだった。
「みんなでやくざと野球やるんだってっ？」

驚いてるのか面白がっているのかよくわからない顔でヒロさんが探偵事務所に飛び込んできたとき、僕はベッドの前に正座してアリスに怒られているところだった。

「依頼客になりそうだったのに取り逃がした上に、状況を悪化させるなんて！　しかも当事者が気絶している間に勝手に話を進めたあげくだ、愚昧すぎて糾弾する言葉も思いつかないよ、猿に三十分間キーボードを叩かせるだけでも、きみよりよほど賢い人工知能プログラムができあがるだろうね！」

「反省してるよ……」

「あれ。なんか空気悪いな」

ヒロさんは僕の隣を通ってアリスのベッドに腰掛ける。

「はいアリス、ミンさんから紫蘇のシャーベットもらってきた。これで機嫌直して」

「機嫌とかそういう問題じゃない、アイスなんかでだまされないぞ！」

とか言いつつアリスはヒロさんの手からカップとスプーンを引ったくる。しばらく、冷房の風の下でシャーベットを口に運ぶしゃくしゃくしゃくした音が響いていた。

「ええと、つまりナルミ君と少佐とテツがそろって一杯食わされたってこと？」

「ええ、まあ……そういうことです」

もちろんあの後、僕らは必死になって「リアルの野球じゃなくてゲームのことだ」と抗議した。しかし言質を取ったやくざほど怖いものはない。ほんの一瞬前までの冗談めかした空気など吹き飛び、タコ坊主は鉛弾みたいな目の色になって言った。

『じぶん、承知した言うたやろ。ガタガタ抜かすなクソガキが』

目を覚ました西村さんにこの顛末を聞かせたところ、もう一度気絶してしまった。

だから一日経った今日も少佐が『GAMEにしむら』に様子を見に行っているはずなのだけれど、僕も一緒に謝りに行った方がいいかな。

「きみが西村店長に謝って、なにがどうなる。もっと現実的な問題に目を向けたらどうだい」

アリスが冷たく言う。

「ともかく西村店長の方からやくざに連絡を入れて、昨日の賭けの約束は店とは無関係だから成立しない、と主張することだね」

「うん……でも……」

それでは問題が振り出しに戻るだけだ。あの店が早晩潰れてしまうことにかわりはない。

「まさか、条件自体は対等なのだから相手の言うなりに野球をやって勝てばいいなどとは思っていまいね」

「ちょっと思ってる」

「きみは死者の代弁者たるニート探偵の助手という自覚がないのかいっ！」

空になったシャーベットのカップを投げつけられた。

「知性と言葉とで事件解決にあたりたまえよ、それを野球なんて」

「野球を馬鹿にしちゃだめだよ、頭だって言葉だって使うんだから」

「きみたちのはどうせ草野球だろう、なにをスポーツマンづらしているんだい」
「ほらナルミ君、野球で勝負なんて話になったらアリスがなにもできなくて寂しいじゃないか、それで怒ってるんだよ」
「どうして寂しいなんて話になるんだッ」
「だって、そもそも依頼があったわけじゃないんだからアリスには関係ない件だろ。なのに口出しするってのはさ」
「うむむ、それは……こらナルミどこに行くんだ、話は終わってないぞ！」

　アリスの相手はヒロさんに任せて、僕は探偵事務所を逃げ出した。ともかく西村さんに話をしにいこう。野球やってもいいなんて言ってしまったけれど、やっぱりアリスの言う通り、西村さんがタコ坊主に賭け取り消しを申し入れるのが筋ってものだろう。あんな条件、そもそも西村さんが呑むはずないし。

　ところが『GAMEにしむら』の入り口にはシャッターが下りていた。携帯電話で時間を確認してしまう。日曜午前十一時、とっくに開店しているはずの時刻だ。店の前にはちらほらと常連客がたむろしている。
「あ、ナルミ」
「今日って休みじゃないよな？」

「昨日のあれ、やくざ？　店長なにかやっちまったのか」
「怖いけど店長心配だったから、今日も来ちまったよ。なんで閉まってんだよ」
「やくざに殴られて入院とか、ないよな」
　常連客が僕を取り囲んで口々に訊いてくる。
「う、うん、怪我したとかってわけじゃないけど……なんで閉まってるんだろ」
　あれからもういっぺん気絶してそのまま寝込んでるとか？　いやまさか。
「そういえば少佐は来てないの？」と訊いてみると、みんな首を振る。
　しかたない。僕はビルの裏手に回った。ゴミ捨て場の脇にあるバックルーム直通のドアは、鍵がかかっていなかった。
「……お邪魔します……西村さーん、いますか」
　バックルームは電灯がついていて、事務机のPCもつけっぱなしだった。ということは西村さん、店には来ているわけだ。おそるおそる踏み込むと、二階で物音が聞こえた。
「お、ナルミくんか。昨日はごめん、ぶっ倒れちゃって」
　西村さんはバケツと雑巾を手に、二階の窓のポスターを剝がそうとしているところだった。
「いやいやいやいや謝るのはこっちですよ」
　あわてて両手と首を一緒にぶんぶん振る。

「ナルミくんもテツとかとつるんでるから、なんか感覚麻痺してるだろ。やくざには、とにかく関わらない方がいいよ」と西村さんは弱々しく笑う。「また昨日みたいに連中が来て、お客に迷惑かかるといけないからさ。ごたごたが片付くまで、店閉めることにしたんだよ」
　そう聞かされると胸が痛む。この人は、ほんとに他人を気遣ってばかりだ。だから、この店は居心地がいいのかもしれない。それなのに僕らは。
「ほんとすみません、勝手に変な話進めちゃって。少佐も僕も、てっきりゲームで勝負だとばっかり思ってて、軽い気持ちで、その、なんというか、その場のノリで」
「あははは。あのつるっぱげやくざが『パワレボ』なんてやるはずないよな。あの人、なんでか知らないけどあのゲームきらいみたいなんだよ」
「……え？　ネモさんが？」
　そもそもゲームなんて興味なさそうだったけど、きらってる？
「最初にあの海坊主が来たときにさ、ゲーセン続けさせてやってもいいって言われたんだ。ただ、『パワレボ』を撤去するのが条件だって」
「なんで……ですか」
「ここの四階に事務所つくるだろ。店の前通るたびに、ガキどもの野球の知ったか話を耳にするのは腹立つ、って言ってた」
　野球がきらいなのか。いや、好きだから腹が立つのか？

「でも『パワレボ』やめるくらいならな。店続けてる意味ないよ。連中の、最初の話を呑もうかと思って」
「パチンコ屋にするっていう」
「うん。親父もたぶん賛成してくれると思う。他にもいっぱいゲーセンあるし、『パワレボ』だってもう前とちがってどこにでも置いてるんだから——」
窓を開いて外側の張り紙を剝がそうとしていた西村さんは、途中で言葉を呑み込み、手を止めた。目を見開いて階下を見つめている。
僕も窓際に走り寄った。
「……なんで……あいつら」
西村さんがつぶやく。店の前にたまっている常連客たちは、散るどころか増えていた。
「おい、この店やばいんだって」「潰れんの？」「もっとしょっちゅう来ればよかったな」
「なあ、今からでもなんかイベントやらね？」「この店で『パワレボ』の大会とか」
「いいな」「ネットで宣伝すりゃ」「ナルミに絵描いてもらってさ」
そんな会話が聞こえる。西村さんは窓に張りついたまま、動かない。
ふと、視界の端に奇妙な形の人影が見えた。迷彩模様のヘルメットで、少佐だとわかる。背負ったバックパックが身体の大きさと同じくらいの大荷物だ。何本ものバットが袋の口から突き出ている。
「きさまら！　これから入団テストをやるぞ！」

少佐が大声で言って、ゲーセンの隣（となり）、潰れたバッティングセンターの入り口あたりに荷物をどっかりと下ろした。

「なんだよ入団テストって」「なんでバットなんて」

「『にしむら』存続を賭（か）けて野球の試合がある、これから選手選抜を行う！」

少佐が説明するにつれて、集まった暇（ひま）な常連客どもがどんどん盛り上がり、ピッキングして開けたバッティングセンターになだれ込む。少佐、懲（こ）りてないのか！

「止めてきます」

僕は階段を駆（か）け下り、裏口から出た。

「いいか草野球は守備で決まる！　だからまずはキャッチングだ、グラブは人数分ないから使い回せ！マシン動かすぞ！」

少佐はピッチングマシンの後ろに陣取（じんど）ってバットを振り回し、てきぱきと指示を飛ばしている。もちろんみんな野球素人（しろうと）なので、吐（は）き出される白球をほとんど捕（と）れない。

「グラブないやつは打撃（だげき）テストに回れ！　最初から100キロの球でいくからな！」

「少佐、なにやってんですか！」

やる気満々のテスト生たちの間を縫（ぬ）って、バックネット裏の少佐のところにたどり着く。

「少しでも使える戦力をそろえねば『GAMEにしむら』存続は勝ち取れん」

「いや、だから、西村さんはこんなのOKしませんってば」
「かまわないだろう。試合で負けたら、そこではじめて店長が『自分は承知していないので賭けは無効』と言い出せばいいのだ。ノーリスクハイリターンの賭けだぞ、やらない手はない」
一瞬（いっしゅん）なるほどと思ってしまった自分が情けない。
「そんな屁理屈（へりくつ）、やくざに通用するわけないでしょう！」
「いいから藤島中将（ふじしまちゅうじょう）もテストだ。動体視力だけはかなりいいだろう、期待している」
「おい少佐、こっちのマシンも動かしてくれよ！」「120キロくらいで来い！」
バットを振り回してそう促（うなが）され、少佐はピッチングマシンをフル稼働（かどう）させる。
「はえええええ」「ゲームなら簡単に打ってんのに」「全然捕れねえ」
「きさまら情けないぞ！」少佐はバットで土をどんどん突いた。「そんなザルな守備ではバントでもホームランだ」
「ばっちこーい！」「かけ声だけかよ！」「声出してけ声！」
「だからみんな、やめろって」
僕がそう言いかけたとき、ふとセンター内が静まり返った。
振り向くと、入口のスティールドアが開いて、天然パーマに眼鏡（めがね）の頼りない人影が入ってくるのが見える。西村（にしむら）さんだ。

「西村さんからも言ってください、だいいちここ潰れた店でしょう、勝手に使ったら」
でも西村さんは手を持ち上げて僕の言葉を遮り、言った。
「バット貸してよ。俺もテスト受けるよ」
僕は口を半開きにしたまま固まってしまう。服を土で汚したまわりの常連客みんなも、呆気にとられている。
少佐が放ったバットを、西村さんは受け止め、打撃ポジションに立った。
「140キロでいいよ。十球、続けてくれ」
西村さんがバットを構えると、太い杭が地面にしっかりと打ち込まれたみたいな緊張がバッティングセンター内を支配した。
それからの五十秒間、僕らの目は西村さんのスイングに釘付けになった。快音とともに弾き返された打球が、完璧な軌道で次々とネットの高みの的に突き刺さる。
西村さんのことを頼りない文系眼鏡青年だと思い込んでいた僕は、呼吸もうまくできなかった。ちらと隣の少佐に目をやると、自分も知らなかった、と言いたげに首を振る。
打撃を終えた西村さんが照れくさそうにバットを足下に置いた後も、しばらくだれも言葉を発さなかった。
「……みんな、ありがとう」

うつむき加減で西村さんがつぶやいて、バッティングセンターの中の数十人を見回す。

「でもさ、相手はやくざなんだよ。本物の。関わり合いになってほしくないんだ。みんなお客なんだからさ。……ごめん、今から店開けるよ。いつも通り遊んでってくれよ。それがいちばん嬉しいんだ、俺は」

それから僕らはぞろぞろとバッティングセンターを出る。西村さんは早足でビルの裏側に回ってバックルームに飛び込む。

シャッターが開き、ゲーム機のやかましさが僕らを迎え入れる。

みんながその光と音の中に流れ込んでいくのを、僕と少佐は店の入り口で立ちつくしたまま見つめていた。やがて、店員用の制服に着替えた西村さんが客たちの間を縫って出てくる。

「少佐、頼みがあるんだ」

川底の砂みたいにさばさばした西村さんの顔を見上げ、少佐は口をきつくすぼめたまま小さくうなずいた。

「チーム集めは、やくざ相手でも大丈夫な連中だけにしてよ」

「がってん承知しました」

「俺も花田とか友造とかに頼んでみる」

それから西村さんは店を振り返って、つぶやいた。

「勝ちゃあいいだけだ」

✲

西村さんが野球部員だというのは、その夜の『はなまる』で聞いた。

「うちの高校、そんなに強くなかったけど、あいつがエースピッチャーだったときに都大会で準決勝まで行ったんだ。けっこうな騒ぎになってさ」

久々に『はなまる』に顔を出した酒屋の友造さんが、焼酎をぐいぐい飲みながらそう教えてくれた。

「もともと野球好きだったんですね……」

友造さんに酌しながら、納得してしまう。それで、ヒットするかどうかもわからない『パワレボ』をリリース直後から店に置いていたわけだ。

「準決勝って、甲子園の二つ前だろ。すごいのかすごくないのか、よくわかんないよな」

カウンターの向こうで、レバニラ炒めをかき混ぜながらミンさんが言う。

「だって他の部員、全然練習してなかったじゃないか。西村だけで勝ち抜いたようなもんだろ。じゅうぶんすごいよ」

「まあそうだけど、今回はそんな楽にはいかないだろ。西村もブランクあるだろうし、あっちだってそれなりのチームかき集めてくるだろうし。ショートとセカンドは、わたしとテツがやるとして……」

「花田もやる気じゃねえか」と友造さんは笑う。「テツはキャッチャーの方が向いてないか」

そのテツ先輩は、店の外にあるビールケース席で、ヒロさんと向かい合って野球のルールの勉強をしている。

「なあインフィールドフライってなんだ。なんのためにあるんだこのルール」

「だから、わざとゲッツーがとれないようにさ」

「どうやって？」

「フォースアウトっての、まずわかってる？」

「いやよくわかんねえ」

ヒロさん、けっこう苦労しているみたいだった。ヒロさんて運動神経はどうなんだろう。体つきはいいから、僕よりはずっと使い物になるだろうけど。

「藤島くんはどこのポジションなのっ？」

丼を洗いながら彩夏が嬉しそうに訊いてくる。

「ナルミはスコアラーだ。きまってんだろ」とミンさんが冷たく言う。

「スコアラーって何塁のこと？」「ベンチで縮こまって記録をとる人のことです……」

彩夏の残酷な無知ぶりに、思わず敬語で答えてしまう僕。

そしてその夜のとどめとして、『はなまる』閉店間際に、少佐がものすごいスペシャルゲストを連れてきた。

「ショートにうってつけの人材を確保しましたよ！」

満面の笑みの少佐に続いてのれんをくぐって現れた人物に、僕は口の中のラーメンを噴き出しそうになる。

「また馬鹿どもが馬鹿馬鹿しいことに自分から巻き込まれやがって」

「四代目っ？　た、退院してたんですかっ？」

僕が素っ頓狂な声をあげると、灰色の髪の下から狼の眼でにらまれる。四代目は黒のタンクトップ姿だったので、まだ腕や肩のあちこちに巻かれた包帯が痛々しく露出していたけれど、血色もよく、殺気もしっかり取り戻していた。僕の隣の椅子に腰掛け、ミンさんにチャーシューメンを注文する。
「え、ええと、四代目もチームに」
「金は出すって少佐が言ってるからな。だいぶなまってるし、リハビリがわりだ」
退院したてなのに大丈夫なのか、と訊こうとしたとき、店の外でテツ先輩たちの声がする。
「なんだ、おまえらも参加か。岩男なんてキャッチャーにぴったりじゃんか」
「だめだよテツ、キャッチャーっていちばん難しいポジションなんだよ、チームの司令塔なんだからルール詳しくないと」
僕はぎょっとして、のれんを持ち上げる。暗がりの街路、テツ先輩とヒロさんの向こうに、二つののっそりした巨体。電柱と岩男だ。あいつらも連れてきたのか。
「伯父貴、あっ兄貴も、よろしくお願いしぁす！」「一発ぶちかまします！」
黒Tシャツの二人は深々と頭を下げてくる。そこはかとない不安がこみ上げてきた。
「ええと……野球のルール、知ってる……わけないですよね」
「押忍！　全然わかりません！」
「ピッチャーにぶつけると何点入るのかも知りません！」入らねえよ。

「馬鹿おまえ、ぶつけると点入るのはホッケーだろ」「ホッケーでもないよ！」
「漫才はいいかげんにしろ。こいつらは頭は空っぽだけど、打って走るだけなら馬鹿でもできるだろ。難しい走塁はあきらめろ」と四代目が言った。「それよりも」
襟首をつかまれ、僕は椅子ごとぐるんと回されて四代目に向き合う。
「審判の手配はついてんだろうな。四人必要なんだぞ」
「審判？　ええと？　そういえばどうするんだろ」
グラウンドの手配もタコ坊主がしてくれるらしいから、まかせておいていいものだとなんとなく思っていた。そう告白すると、四代目は深々とため息をつく。
「あのな、相手はやくざだろうが。どんな汚い手でも使うぞ。審判の手配まで任せるとかアホか。公平なジャッジができる第三者に頼め。もちろんやくざにびびらないやつだぞ」
「いや、そんな人いるわけないじゃないですか」
「いいから草壁昌也に電話しろ」
「え、ええええーっ？」ここでその名前が出てくるの？
でも、言われてみればたしかに。あの人はタコ坊主とも知り合いだ。クールな人だし、僕にも四代目にも借りがあるからタコ坊主に必要以上に肩入れするってこともないだろう。
今すぐ電話しろ、と四代目にせっつかれ、僕は携帯を取り出した。

もちろん草壁昌也は用件を聞いてあきれかえり、二十回くらい舌打ちした。

『おまえらはほんとに馬鹿なことしか考えつかねえのか。勝ち目があると思ってんのか?』

「そのゲーセンの店長、都大会でけっこういいとこまでいったらしいし、他にも運動神経いいやつがいっぱいいるから、なんとか」

『馬鹿かおまえは。根本は甲子園で何勝もしてるピッチャーだぞ』

「えええええええええ」

耳元でわめくな馬鹿野郎、と叱られてしまう。しかし、想像だにしていなかった。あのタコ坊主も野球少年だったの?

ああ、だからそれで——『パワレボ』が気に食わないのか。いや、それだけじゃ理由にならないか。同じ理由で西村さんは『パワレボ』を愛しているのだし。

『俺は学生の頃からつるんでたが、行きたくもねえタイガースの試合によくつきあわされた。野球馬鹿だったんだ。プロに行く気だったし、実際にスカウトにも目をつけられてた』

僕は携帯電話を左手に持ち替え、汗ばんできた右手の平を太ももにこすりつける。それだけ野球好きだったのに、なんでやくざになってるんだ。

『知らねえよ。もう三十年も前の話だぞ。とにかく、馬鹿みたいに速い球投げるやつだった。荒れ球だったけどな、とても高校生が打てる球じゃなかったぞ。ましてやおまえらが』

「ブランクがあるじゃないですか。それならなんとか」
　そう言い返しつつも、僕は沈みかけていた。ブランクがあるのは西村さんも同じだ。
「ええと、だからその、とにかく、やくざに凄まれても動じないでジャッジできる審判が必要で、草壁さん以外に頼める人が」
『わかったよ。ガキのままごとにつきあうのはこれが最後だ。ばらばらの組から、野球に詳しいやつを一人ずつで、四人連れてく。それでいいんだな』
「ほんとお世話になります、あ、あの、ギャラもちゃんと払いますから」
『当たり前だ』
　電話を叩ききられ、みんなに「タコ坊主って甲子園勝ち投手だって」と話すと大騒ぎになった。少佐、なんとか養成ギプス用意しろ。わかりました明日持ってきます。タコの頭にぶつける練習しようぜ。テツおまえピッチャーじゃないだろ。じゃあバット投げて……
　そんな会話をぼんやり聞きながら、ふと浮かんできたのは、こんな思いだった。
まるで二ヶ月遅れのオールスター戦みたいだ。
　そんなわけで、我々のスターティングオーダーは以下の通り。

1　ミンさん（二）

2　四代目　（遊）
3　西村さん（投）
4　テツ先輩（三）
5　岩男　（右）
6　ヒロさん（中）
7　少佐　（左）
8　友造さん（捕）
9　電柱　（一）

こうして列記すると、ものすごく強そうに見える。とくに一番から四番まで。そして八番九番はもうひとつのクリンナップである。なんという抜かりのない打線！

僕？　もちろん補欠である。

「藤島くん、一緒にレモンの砂糖漬け作る？」なんて彩夏に言われてしまった。

✱

ゲーセンの隣にあるあのバッティングセンターは、そのまま練習場として使うことになった。放課後、直接そこに顔を出すと、もう少佐もテツ先輩もヒロさんも来ていて、西村さんにコーチングを受けている。

「もっと脇しめて。腕だけで振らない。腰を軸にして、身体全体が雑巾絞るみたいにしてぎゅうっと、そう、そうするとバットが自然に前に――」

なんて打撃指導している西村さんはかなり楽しそうで、僕も（補欠だけど）学校のジャージに着替えて練習に加わる。代打の切り札らしいのでひたすらに素振りだ。初日でさっそく手にまめができてしまった。

タコ坊主がやってきたのは、僕らのチーム結成二日目のことだった。

「ほう、精が出るやないか。素人が必死やな」

ネット越しにバッティングセンターの中を眺め渡し、ちょうど盛大な空振りでずっこけていた僕と目が合い、にたりと笑う。その日は顔ぶれのちがう若い男二人を連れていた。どちらもスポーツマンぽい引き締まった体軀で、野球チームのメンバーかもしれなかった。サングラスにアロハシャツなので、かたぎには見えない。

「わざわざ来ていただいてすみません」

西村さんはへこへこ頭を下げながら外に出た。テツ先輩もヒロさんも、そちらを気にしながらストレッチを続けている。
一応、なにがあるかわからないので、僕はバットを持ったままそうっとドアから外の通りに出て西村さんの背後に控えていることにした。やくざはどんな汚い手でも使う、という四代目の言葉が耳から離れなかったからだ。
「場所と日時がきまったで」とタコ坊主。一週間後に、河川敷の野球場で、とのことだった。
「お手数おかけしました」西村さん、あくまで低姿勢。
「試合は正午からやけど、会場は十一時からとってあるから十一時集合や。ちっとは球場で練習したいやろ」
その気遣いぶりが、なんだか逆に怪しかったけれど、西村さんは素直に礼を言う。
「正直、店長はしらばっくれると思うとったで」
タコ坊主は西村さんの顔と僕の顔を順番に凶悪な視線でねめ回した。
「なんで試合やろうなんて気になったんや」
西村さんは照れ笑いする。
「……野球で決めるなら、いいかなって思って。ほとんど潰れかけてたのが、野球好きってだけで入れたゲームのおかげでちょっと生き延びちゃったようなもんだから。潰れるかどうかも野球で決めるのって、悪くないですよ」

タコ坊主は鼻で笑い、それから地面に唾を吐き捨てた。僕はぞっとして後ずさる。タコ坊主の両眼に鉛色の光が宿っている。

「虫酸が走るわ」

その低い声が聞こえたのか、ゲーセンの入り口近くにたまっていた常連客までもがぎょっとしてこっちを見た。

「遊びだのゲームだので野球やっとるその脳天気さ見てるとな、潰したくなるんや」

西村さんの横顔はこわばっていた。僕はもう一度、おそるおそるタコ坊主の顔に目を戻す。どうしてそこまで。憎悪すら感じる。

「……ネモさん、甲子園で何度か勝ち進んだこともあるんですよね」と言ってみた。タコ坊主の目が一瞬だけ見開かれた。

「だからなんや」

「い、いえ」声が喉の内側に張りつく。「プロからも声が掛かってたって。それなのに、なんだか野球がきらいみたいで。それなら、なんで野球で勝負しようなんて」

気づくと、眉毛のない凶暴な形相がすぐ目の前にあって、息もできない。襟首をつかんでねじり上げられたのだ。

「素人がわかったふうな口きくなや」

「根本(ねもと)さんっ」青い顔で詰め寄ってきた西村さんをひとにらみで黙(だま)らせ、タコ坊主は再び僕に視線を戻し、さらに襟をしめあげる。

「たかが甲子園がなんや。じぶん、今年の高校野球の勝ち投手、何人憶(おぼ)えとる？　一人憶えてたらええ方やろ。みんな忘れるわ。年に何人、甲子園に出ると思っとんのや。プロにでもならん限り、どいつもこいつも夏が終われば忘れられるゴミや。ええか、銭(ぜに)にならへん野球なんてゴミなんや。この野球は銭になるから、わしが投げる。それだけや」

タコ坊主は僕をアスファルトの上に投げ捨てた。身体(からだ)中の空気が押し出されてしまったかのようで、僕は尻餅(しりもち)をついたまましばらく動けなかった。西村さんも、タコ坊主の後ろに控(ひか)えた二人のやくざさえも、気圧(けお)されて一言も口をきかなかった。

開きっぱなしのバッティングセンターのドアからいくつか転がってきた白球を、タコ坊主は身を屈(かが)めて拾い上げた。

その右腕(うで)が一閃(いっせん)する。

なにかの軋(きし)みが聞こえ、ゲームセンターの中で、何人かの客が驚きの声をあげた。

「なんだ今の」「おい、これ」「ボール？」「はまってンぞ」

僕は、そのすさまじいピッチングを目の当(ま)たりにしていた。弾丸(だんがん)のごときストレートが、店のいちばん奥にある『パワレボ』の筐体(きょうたい)に突き刺(さ)さって、めり込んだままになったのだ。あの日、タコ坊主(ぼうず)当人が殴(なぐ)って穿(うが)

ったあの凹みと同じだけの深々としたクレーターがもうひとつできている。
騒然とする店内、そして呆けたままの僕らに背を向けて、タコ坊主は歩み去った。
言葉だけが、いつまでも耳から離れなかった。
夏が終われば、忘れられる――

「――それでも、やるしかねえだろ」
夜中の『はなまる』でのミーティングで、テツ先輩が言った。
「いざとなりゃ場外乱闘に持ち込んでボコボコに」
「相手はやくざが九人だろ。ああいや補欠入れて二十人くらいまであり得るんだっけ。いくらテツでも無理だろ」と隣の席のヒロさんがたしなめる。
「一球二球で勝負するわけじゃねえんだ」四代目が日本酒をあおりながら言った。「スタミナは絶対に年齢が響いてくる。後半なら、叩ける」
それはたぶん、だれよりも、真ん中の席の西村さんに向けた言葉だった。僕らのエースは、眼鏡の奥の目をしばたたき、それから頼りなく笑ってうなずく。

背後では、少佐が電柱と岩男を叱咤している声が聞こえる。ちっともルールを憶えようとしないので携帯用ゲーム機の野球ゲームで憶えさせているのだ。

「このビールはうちの店からのサービスだ」と、勝手口から友造さんがビールケースを抱えて入ってくる。

「勝ったらビールかけに使おうぜ」

「気が早すぎるだろおまえは」とミンさんが中華鍋を振りながらあきれる。

「ああそうだ、それから、外にこんなのが隠れてたぜ」

「は、離したまえ、ぼくは猫じゃないぞっ」

友造さんに襟首をつかまれて厨房に引っぱり込まれたのは、青いパジャマ姿のアリスだ。腕には大きなクマのぬいぐるみと、そしてなぜか——野球帽を握りしめている。

みんなの視線が、そっぽを向いたアリスの黒髪に集まり、鶏ガラ臭い蒸気にまみれた沈黙がしばらくの間ただよう。

「なんだい。なにか文句があるならはっきり言いたまえ」

アリスはついに振り向いて、赤らんだ顔で言った。なぜか僕をにらんで。

「仲間はずれが寂しいなら最初から言えよ。彩夏が奥でレモンの砂糖漬けつくってるぞ」

ミンさんが言うと、アリスは野球帽を握り潰して激昂した。

「だれが寂しいなどとっ！　いいかいきみたち全員によくよく言っておくがナルミはぼくの助手なんだから無断で使い走りをさせないでほしい！」

「ええと……」

　周囲からの「なにか言え」的な視線に押されて、僕は口を開く。

「まさかアリスもチームに参加するとか言わないよね」

「もちろん参加する」

　笑えない冗談はやめてくれないかな。たとえ話でもなんでもないそのままの意味で、箸より重いもの持ったことないだろおまえ？

「あたしが依頼したの」と、奥の廊下から彩夏が顔を出す。「アリス寂しそうだったし、女の子多い方がみんなやる気出るでしょ？　依頼料の心配しなくていいよ、支払いの代わりに、今度からお風呂のときに必ずシャンプーハット使うっていう約束で」

　なんちゅう余計なことを。僕はえらそうに胸を張るパジャマ姿の探偵に向き直る。

「え、ええと。無理しないで。アリスにできるポジションなんて」

「ポジションなんてきまっているだろう！」

　アリスは僕の眉間に刺すほどの勢いで指を突きつけてきた。

「もちろんぼくは監督だ」

沈黙が、古びた林檎のような呆けた味に変わった。

……監督。アリスが、監督？

「マジっすか姐さん！」僕の右側から電柱の声。「監督っスか！」左から岩男。

「野球の監督なんてできねえだろアリスは」テツ先輩があきれた声を漏らす。けれどアリスは指鉄砲を先輩にも向ける。

「きみは三番を打ちたまえ。友造が四番だ。西村店長には五番を打ってもらう。岩男、電柱が六番七番だ」

「なんで。自分で言うのもなんだけどパワーとミートを考えて俺が四番だろ。西村さんは最強打者なんだから三番できまり、それに下位打線にもインパクトほしいし」

「フィーリングで語るのはやめたまえ。ボクサーとしてのパワーと長打力に関連性などあるものか。ホームランを狙って打つ技術があるのは西村店長だけだ。電柱と岩男もたまに打つ。きみたちが強打者だと勝手に考えているテツ、四代目、マスター、友造、これはみんな出塁率が高いだけだ。だからホームランバッターの前に並べるしかないんだ、消極的打順戦略だよ」

「なんでそんなの知ってるの、みんなの出塁率とか」と僕は口出ししてしまう。

「少佐が練習中に録っている動画を見たのだよ」

ちらっと背後をうかがったら少佐もびっくりした顔だったので、たぶんクラッキングしたんだろう。なんでそこまでするんだ。

「他にも、きみたちの戦術とやらは見ていられないくらいひどい。下位打線の充実というのはね、プロ球団の考え方だ。普通ならば七番八番は守備力重視の選手を置くところを、守備に難はあるが強打の者をあえて採用する──というような選択肢があって、はじめて生まれてくる思想なんだ。寄せ集めで人数ぎりぎりの素人チームが考えなしに真似するなんて噴飯ものだ。打力は前から固めて置くのが合理的にきまっているだろう」

理路整然と並べ立てられ、おまけに唯一の野球経験者である西村さんが「たしかになあ」と頭を掻くので、僕らはうつむくしかない。

それにしても、アリスがこんなにも野球に本気になってるとは思わなかった。

「お願いしぁす姐さん！　いや、監督！」「お願いしぁす！」

電柱と岩男の勢いに気圧され、それでも僕は戸惑い、テツ先輩や四代目の顔を見る。苦笑したり肩をすくめたりといった空気の中で、西村さんが──僕らのチームリーダーが、アリスに向かって訊ねる。

「……試合中に、指示出せる？」

はっとしたいくつもの視線が、アリスと西村さんの間を行き交った。

「もちろんだ。ヒロ、当日は車を出してくれたまえ。車内から指示を出す」

ヒロさんは返事のかわりに日本酒の入ったコップを差し上げた。

「じゃあ、頼むよ。ちゃんとした、俺からの依頼だ」
　この西村さんの一言で、決まってしまう。探偵は力強くうなずいた。
「きみたちの空っぽの頭のかわりに、ぼくがチームの頭脳になる。野村克也も言っているが野球は頭でやるスポーツなのだよ。まずは走塁サインを頭に叩き込む」
「押忍！」「男磨かせてもらいぁす！」「うるせえから外でやれ」「マスターも選手なのだろう、全員で憶えるんだ」
　アリスは厨房の台によじ登った。
「いいかい、どうせきみたちは難しいことは憶えられないだろう。ぼくがこうして帽子で胸を二回叩いたら『全員進塁』、一回叩いたら『進塁するな』あるいは『戻れ』だ」
「姐さんの胸はただでさえねえのに」「叩いたらへっこんじまう」
「黙りたまえっ」アリスは真っ赤になって台の上で飛び跳ねた。「ぼくの胸の心配より自分の脳みその心配をしたらどうだい！　次は打撃サインだが――」
　もちろん、熱気に包まれた厨房でそんなことをやっていたら、暑さに弱いアリスはすぐに倒れてしまう。赤い顔でぐったりした探偵を担いで、僕は探偵事務所に戻った。
「うむ……情けない。こんな有様では実際の試合で指揮を執れない」
　きつく冷房のかかった寝室でベッドにうつぶせになり、アリスは弱々しくつぶやく。

「そんな無理しなくても。監督なんてさ、絶対必要ってわけじゃ」
「根本喜一は京都の強豪校の野球部員だった。二年生の夏にエースナンバーを背負っている」
アリスがぬいぐるみに顔を埋めたままつぶやいたので、僕ははっとして彼女の目を見つめ返した。根本喜一。ネモさん――タコ坊主のことか。
「夏の甲子園で準々決勝まで進んだところで敗退し、その直後に、暴力団の野球賭博にからんで八百長をしていた嫌疑がもちあがり、自主退学している」
「高校野球で……八百長？」
「週刊誌や新聞の記事が残っている。根本喜一の親族が暴力団にかなりの借金をしていたらしい。彼は従うしかなかった。八百長の詳しい内容まで明らかになっている」
その調査結果をアリスは画面に呼び出してくれた。僕は一読して息を呑む。
「……こんな……こんなやり方の八百長、できるの？」
「できてしまったんだ。根本喜一は、それほどの投手だったのだよ。でも、金をつくるためには、それほどの技術を不正に使うしかなかった」
僕はぞっとして、あのときのタコ坊主の言葉を思い出していた。
『銭にならへん野球なんてゴミなんや』

そういう意味なのか。あまりにも、そのまんまじゃないか。それで、プロになれたかもしれない未来は潰れて──そのまま夢を捨てて、自分もやくざになったのか。
「ぼくが調べられたのは、そこまでだ」
アリスがぬいぐるみでフィルタされてくぐもった声で言う。
「三十年前だから、スコアブックだって残っていない。根本喜一がいったいどんな投手だったのか。どんな球を投げて、どんな汗を流して、どんな言葉を残した人間だったのか。どこにも残っていない。みんな忘れられてしまった」
そう、毎年の春と夏に、熱い思いを敷き詰めたあの聖地に、千人を超える球児たちが集まる。そしてみんな──一チームを残してみんな、負けて、泣いて、散って、忘れ去られる。
その敗者たちのほとんどを、だれも憶えていない。
タコ坊主が記憶されたのは、皮肉にも、スポーツとしての野球を外れた罪によってだ。金が動いたからなのだ。
あとはみんな、忘れ去られた。
「それでも、これだけはわかる」アリスが冷ややかな声で囁く。「なめてかかって勝てる相手じゃない。きみたちにはぼくの頭脳が必要だ」
僕はうなずいた。

ほんとうは、タコ坊主にしめあげられたときからかなり不安で、だから、アリスが来てくれたのは嬉しかったのだ。戦うのは、フィールドの中にいる者だけじゃない、という実感。

タコ坊主、あんたはどうだった？　ひとりで戦ってたわけじゃないんだろう。マスクの向こうで相棒が、背中で七人の仲間が、ベンチからいくつもの目が、見守っていたんじゃないのか。ほんとうに、みんなから忘れ去られたのか？

そのときふと、僕はその可能性に思い至る。

ほとんど無意識に立ち上がった。だから、アリスの不思議そうな声に、こっちが訝る。

「どこへ行くんだい」

「え？　あ、あ、ああ」

自分の手と足を見下ろしてしまう。爪先はもうすでに事務所の玄関に向けられている。指先にまで、ほのかな生気が伝わって、クーラーから吹き下ろす冷気を中和している。

じっとしていられなかったのだ。

「調べたいことがあるんだ」

どうせ補欠なんだから、僕は走り回るしかない。

事務所を出て非常階段の踊り場から見下ろすと、チームメイトたちが酒を飲み交わすほの明るい光の輪が階下に見えた。

＊

夏の終わりをほんとうに感じるのは、実は晴れ上がった空と照りつける陽（ひ）の下だ。中天に差しかかって地面をじりじり焼いているはずなのに、光が肌（はだ）をぴっちりと覆（おお）い尽くすような感触（かんしょく）がない。ときおりの風が頬（ほお）に優しい。

九月の末、日曜日の午前十一時前。

僕が自転車で河川敷（かせんしき）の野球場に到着したとき、すでに何台かの車が草地に並んでいた。申し訳程度のバックネットと砂埃（すなぼこり）でたっぷり汚（よご）れたベンチ。土に埋（う）もれかけた塁（るい）。外野には雑草さえ生（お）い茂っている。グラウンドにまばらに散った男たちの間を、白球が飛び交っている。

こんな遠目なのに、パンチパーマや剃（す）り込みで、全員やくざだとわかる。ユニフォームなどないからみんなアロハシャツやタンクトップなのだけれど、きっちり統一されたチームカラーを醸（かも）し出しているのが怖い。

タコ坊主（ぼうず）はホームベースのところでバットを手に、ノックの球（たま）出しをやっている。なんかみんな動きのキレがいい。不安になってきた。

「ナルミ君！」見憶（みおぼ）えのある青い外国車の陰から、ヒロさんが手を振ってくる。草ぼうぼうの斜面を下りると地面から立ちのぼる焼けた砂のにおいが強くなる。ヒロさんの車の後部座席にはぎっしりとぬいぐるみが詰め込まれていて、黒髪（かみ）の頭がかろうじて見えた。

「アリス、ほんとに車の中から指示出すの？」

窓から訊ねると、シートにぺったり正座したアリスは頭を持ち上げて野球帽をかぶった。
「もちろんだよ」と、青い顔で僕をにらむ。「相手球団だけではなく、太陽と大気と大地のすべてがぼくの敵だ。でもぼくは逃げない」
いや、逃げていいよ。そこまで苦しそうなら事務所でひきこもってろよ。
一つ隣のクーペの運転席からおりてきたのは、四代目だ。野球帽だけはアリスやヒロさんとおそろいなのでなんとなく笑える。
「少佐はまだか。あいつが器具を持ってくるんだろ」
「昨日、夜中まで『パワレボ』やってたんで、寝坊してるかも」
「馬鹿か。なんで試合前日にゲームなんて」
僕らが話していると、やくざチームの何人かが四代目の背後に寄ってきた。
「ほう、おまえナルミか」え、僕？
「最近ブイブイいわしてるってな」「田原組、潰したらしいじゃねえか」
「い、いえ？　つつ潰してなんかいませんよ？」
ガタいのいいやくざに囲まれて僕は枯れたブロッコリーみたいに縮こまる。そっちの業界にどんな歪んだ噂が伝わってるんだ。あの後、田原組がだいぶまずいことになったのはちらっと聞いたけど、僕のせいにしないでほしい。

「雛村ァ、てめえら最近ほんと調子こいてンなあ」

やくざはそばにいた四代目にも、冗談めかした感じでからむ。

「遊びで済むのは今日だけだと思えや」「ネモさんの優しさに感謝しとけ」「コールドの取り決めはしてねえらしいな。あきらめたらいつでも頭下げろや。二十点差とか見たくねえだろう」

「馴れ馴れしく触るな」と四代目は一歩も退かずに言い返した。「そっちこそ後半息が上がったり熱射病で倒れたりすんなよ。救急車呼ぶのもめんどくさい」

「は、言うじゃねえか」

僕がはらはらしながらそのやりとりを見守っていると、さらに一台の車が河岸に姿を現した。白いワゴン車だ。ドアが開き、これまたやくざと一目でわかる派手な柄シャツの中年男四人が相次いでおりてきた。運転席からは、クリーム色のサマースーツを羽織ったサングラスの男が出てくる。草壁昌也だ。ということはあれが審判団か。なんだか、草野球のわりにはえらく本格的だ。球審用のプロテクターとマスクまで自前で用意しているし。

ワゴンの助手席から飛び出してきた最後の一人を目にして、僕は仰天する。

「助手さーんっ!」

腕と三つ編みの髪を振り回して斜面を駆け下りてくるのは、カフェオレ色の肌がまぶしい女の子だ。なんでメオまで来てんだよ。

「お父(とう)さんに聞いたから応援しにきた！　野球観(み)るのはじめて！」
　メオは僕の腕(うで)に抱(だ)きついて言う。草壁昌也はにがい顔をしてこっちにやってくる。
「助手さん、ポジションどこなの？」
　そこのベンチです、とも言いづらい。困っていると、一台の自転車が危なっかしくサイクリングロードをはずれてこっちに滑(すべ)り降りてきた。
「藤島(ふじしま)くん、飲み物とかレモンとか持ってきたよ！」
　クーラーボックスをかついで自転車から飛び降り、駆(か)け寄ってきた彩夏(あやか)は、メオとばったり顔を合わせてお互いに「えっ？」「えっ？」という表情になる。そういや初対面だこの二人。説明がめんどくさいので僕はメオの手をはずして逃げ出した。ちょうど大荷物を抱(かか)えて石段をおりてくる少佐(しょうさ)が見えたから、運ぶのを手伝わないと。

背後で車のドアを開ける音がして、「探偵さんもお久しぶりっ」とメオの声がそれに続く。

「わ、突然なんだメオ放したまえ！　や、ひゃうっ」アリスが奇妙な声をあげる。

「アリスは首筋が弱いんだからいきなり触っちゃだめなの！」彩夏が叱る声もする。店ひとつの存亡がかかってる試合なんだけど、緊張感皆無だ。

でも、十一時を過ぎても西村（にしむら）さんだけが姿を現さなかった。僕らは不安に思いながらも練習を始めた。ノックは四代目がかわりに出すことになった。なかなか堂に入ったバットコントロールだった。タコ坊主（ぼうず）がこっちを見て、一度だけにやりと笑った。不安になった僕がベンチに戻って西村さんに電話しようとしたとき、手の中で携帯（けいたい）が震（ふる）えた。

『悪い、今、病院に向かってるとこだ』

　西村さんは息を切らして言った。病院？　まさかお父さんが危篤（きとく）とか——

『親父（おやじ）から電話があった。組の連中が来て、契約書（けいやくしょ）にハンコ押せって迫ってる』

「え、え？　契約書（けいやくしょ）？」

『金もらって店明け渡すって契約だよ！　俺（おれ）がゴネたから親父（おやじ）の方に説得に行ったんだ、俺が行くまでなんにも話を進めるなって言っといた、今から病院行って止めてくる。なんとか試合開始に間に合うように戻るから』

　電話は切れた。僕は信じられない思いで、一塁（るい）側ベンチのタコ坊主（ぼうず）を見つめる。

　なんでだ。どういうことだ。試合に勝てば出ていかなくてもいいって約束じゃないのか。タコ坊主と一瞬（いっしゅん）だけ目が合い、含み笑いが返ってきて僕はぞっとする。

やくざは、どんな汚い手でも使う。

万が一、試合に負けても絶対に損をしないようにと、保険をかけやがったのだ。

バッターボックスのところまで走っていって、四代目に説明した。テツ先輩も、ミンさんもホームベースのまわりに集まってくる。

「西村が直接行ったのか？　病院までどれくらいだ。往復で三十分はかかるか？　もっとか」

「十二時に間に合わねえかも。オーダー替えとくか」

一塁のあたりで聞いていて事情をなんとなく察したらしい岩男が、ベンチのタコ坊主にグラブを突きつけて言う。「汚え真似するじゃねえか！」

「知らへんわ。なんのこっちゃ」

タコ坊主は土の上に唾を吐く。しかし、もちろん知っていないはずはなかった。立ち上がってバックネット裏の審判団のところに行くと、こんなことを言ったのだ。

「どっちも九人そろってるわ。練習でバテてもしゃあないし、もう始めようや」

「ま、待ってください！」

僕もバックネットを迂回してタコ坊主と草壁昌也との間に割って入った。

「まだ西村さん来てません、だいいち試合開始は十二時からって」

「はん？　草壁、わしそないな話したか？」

草壁昌也はサングラスの奥で目を細め、肩をすくめた。

「さあ。十一時に来いとしか言われてねえな」

「い、いやでもっ」

「それにな」タコ坊主はとどめを口にした。「この場所、昼の一時までしか借りてへんのや。さっさと始めんと時間内に終わらんで」

「な――」

僕は絶句する。駆けつけた四代目も、やられた、という顔のまま固まった。

試合場の手配などという重要なことを、敵に一任した――僕らの痛恨のミスだ。みんなタコ坊主の作戦だ。草壁昌也が審判四人を見渡し、しょうがねえな、なら始めるしかねえか、と言葉を交わすのを遠く聞く。

負けても損をしないようにと保険をかけるのに加えて、こちらの最大戦力である西村さんを排除する、致命的な二箇所攻撃。

「おいガキども、打順さっさと出せ！」主審ががなり立てる。僕は四代目に襟首をつかまれて、三塁側ベンチの後ろ、車が並べて駐められているあたりまで引きずっていかれた。

「西村、電話に出ねえぞ」と友造さんが青い顔で言う。そうか、病院だから電源を切っているんだ。あまりの狡猾さに膝が笑い出しそうだ。

「どうすんだよ」
「しかたないです、投手は四代目、友造さんがショート、岩男が三塁で」
「打順は。西村さん5番だぞ」「中将を9番で、一つずつ前にずらして」
「――ナルミ！」
　少女の声に、集まったチーム全員が車の方を見た。
　窓が開いて、アリスが顔を出している。つややかな長い黒髪が野球帽の下から流れ落ちる。
「きみが病院に行け、店長を連れ戻すんだ」
　僕は唖然としてアリスを見つめ返した。
「なにをぼうっとしているんだい、早く！　電話が通じないのだから直接行くしかない、やくざが待ちかまえている病院にのこのこ行ったんだ、そのまま待っていても帰ってくるものか、なんだかんだと引き留められるにきまっているだろうっ！　きみはチームでいちばんの雑魚なんだからきみが行くしかないんだ」
「い、いや、でも、九人いなきゃ試合が」
「彩夏！」
　アリスにいきなり呼ばれ、ベンチでメオと並んで座っていた彩夏が跳び上がった。
「きみは9番ライトだ」
「ええーっ？　あ、あたし？」

「店長が戻ってくるまでだよ、ほらナルミさっさと行け、一秒でも惜(お)しい！」
それでもまだ理屈(りくつ)を呑(の)み込めず呆(ほう)けていた僕は、四代目に尻(しり)を蹴飛(けと)ばされ、自転車の方に向かった。スタンドを蹴(け)り上げ、ハンドルをつかんで草の斜面を押し上げ、サイクリングロードを走り出す。向かい風の中で、ようやくアリスの意図が頭に染(し)み込んでいく。たしかにそれしかない。彩夏なんかを病院に行かせるわけにはいかないのだ。僕が行くしかない。
背後で、球審(きゅうしん)の大声が聞こえた。
「プレイ！」

汗(あせ)みずくで息を切らせ、看護婦(かんごふ)の制止の声を振り切って僕が病室に駆(か)け込むと、右側中央のベッドを取り囲んでいた何人かの男が一斉(いっせい)に振り向いた。
このクソ暑い中に、どいつも黒いスーツで、柄(がら)シャツの襟や金鎖(きんぐさり)をのぞかせ、淡い色のサングラスをかけている。西村(にしむら)さんはベッドの逆側の椅子(いす)に腰(こし)を下ろしていて、僕を見てぎょっとなり腰を浮かせた。ベッドの髭(ひげ)ぼうぼうのくたびれきった老人も、身を起こして僕を見る。
「……ナルミ君……なんで」
西村さんがうめいた。やくざは四人いる。ありがたくないことに僕の顔を見知っているらしく、「おい、あれ」「雛村(ひなむら)んとこの」「根本(ねもと)さんが言ってたやつか」と囁(ささや)きあっている。

消毒液臭い病室を横切って僕は西村さんに駆け寄った。他に五つのベッドがあって、入院患者はみんなカーテンを閉じるか、こちらを見ないふりをしている。それはそうだ、いきなり見てそれとわかるやくざが四人もずかずか見舞いに来たのだから。

「もう試合が始まってます」

そう声に出すだけで、嗄れきった喉がひりひり痛んだ。西村さんはぎょっとして、やくざ四人の顔を見回す。

「……ほんとに野球なんかで決めようとしてたのか」

ベッドの老人がうめいた。西村さんのお父さんだろう。よくよく見れば老人というほどの歳ではなく、おそらく長い病が身体を痛めつけて縮こまらせてしまったのだ。

「馬鹿かおめえは。あんな店、もうめんどくせえだけじゃねえか。放り出せっつってんだろ」

「ほら西村さん、親父さんもこうおっしゃってる」

「なあ、そもそもあんたはただの店長だろ。オーナーは親父さんなんだ、口出しすんなよ」

「おいガキ、てめえなにしに来たんだ。取り込み中だ見てわかんねえのか」

やくざの一人がこっちに寄ってきた。病院内だ、暴力は振るうはずがない、そう言い聞かせて僕はやくざの脇を通り抜けベッドの向こう側に回る。サイドテーブルの上に置かれた紙が目に入る。たぶん契約書だ。ハンコまで用意してある。

「試合始められたんです、西村さんがいなきゃ」

「おい、てめえ」
　肩に手をかけられた。指がきつく食い込む。でもそれだけだ。西村さんは僕の顔をのぞき込み、お父さんに視線を移す。
「親父、頼むよ。やらせてくれよ。俺、あの店続けたいんだよ」
「負けたらどうすんだ、一文ももらえずに放り出されたら踏んだり蹴ったりじゃねえか」
「親父さんの言う通りだ。青いこと抜かしてんじゃねえ」
「親父!」
　ベッドに両手をついて、西村さんは叫んだ。
「頼むよ、負けっぱなしはいやなんだよ!　野球で勝負なんだ、俺それ以外なんの取り柄もないんだ、親父も知ってんだろ、野球だけなんだよ!　ど真ん中に絶好球がきたのにバットも振らずに見逃せってのかよ!」
「おい、病院でわめくんじゃねえ迷惑だろが」
「親父さんだって困ってんだろ、とっとと帰れ」
「もう決まった話なんだよ、現実見ろよガキじゃねえんだから——」
　やくざたちが集まってきてベッドから西村さんを引きはがそうとする、その腕の向こう、僕はたしかに見た。

しわくちゃの髭面にぴんと生気が戻り、目が見開かれ——骨ばかりの手が、サイドテーブルに伸びるのを。

「——親父！」

西村さんが悲鳴にちかい声をあげるのと、お父さんの手が契約書を真っ二つにするのはほとんど同時だった。やくざたちの視線も、病人の両手で四つに八つにと引き裂かれていく紙に注がれる。僕や西村さんの肩をつかむ手から、ほんの一瞬だけ力が消えた。

僕は西村さんの腕を引き、すぐ隣のやくざを突き飛ばした。

「——ぉっ」「てめえ！」

ベッドの間を抜け部屋の出口に走る。

「負けたらはっ倒すぞォッ」

お父さんの声が背中に叩きつけられ、僕と西村さんを廊下に押し出す。四人分の足音が殺到する目の前でドアを蹴飛ばして閉め、僕らは走り出した。

看護婦や医者の怒声をくぐり抜けて病院の棟を出る。汗が全身から噴き出した。

「やばい、張られてる」と、西村さんは僕の腕を引っぱって立ち止まった。広い駐車場に駐められた車はまばらで、だから出口近くの赤い車体も、そのトランクやボンネットに腰掛けて煙草をすっている何人かの人影も、すぐにわかった。やくざが待ちかまえているのだ。タコ坊主が張り巡らせた何重もの罠だ。熱気で

焼き切れそうな僕の頭がフル回転する。タクシーを待っていたら病室から追いかけてくる四人にすぐ捕まる、だとしたら――

「僕っ、自転車で来てます」

西村さんはうなずいて踵を返した。駐輪場で僕らを待っていた自転車は、陽で焼かれてハンドルもサドルも肌に張りつくほど熱くなっている。

「俺が漕ぐ、後ろ乗れ！」

荷台に乗る前にちらと携帯で時刻を確認した。正午前。間に合うだろうか。試合はどれくらい進んだだろう。でも連絡している余裕もなかった。西村さんの腰に両手を回すと、ぐんと加速して風が僕の肌にまとわりついた熱ぼったい汗を吹き飛ばす。

サイクリングロードの向かい風の中、バットの音や、野手ががなりたてる声がようやく聞こえてきて、腕の中で西村さんの身体がいっそう熱くなったような気がした。僕ら二人を乗せた自転車は草の生えた河岸の斜面を滑り落ちる。二人とも、ほとんど自転車を蹴飛ばすようにして飛び降りた。タイヤが空回りする音を背中に聞きながらグラウンドに向かって走る。最初にベンチの褐色の肌をした少女が僕らを見つけて立ち上がり、「助手さんっ」と手を振った。でも僕はメオの肩越し、草壁昌也の背後にあるスコアボードを見やって、切れ切れの息を吐く。

「……一点差か……」
西村さんがうめいた。八回の裏、僕らのチームの攻撃中だ。投手戦だったのか、スコアボードのほとんどを0が埋めていた。

2対3で——負けている。

僕はグラウンドを見渡した。一塁に少佐がいる。ネクストバッターズサークルでは、彩夏がバットにすがりついて縮こまっている。その向こう、ヒロさんが弾いたファウルチップをすさまじい反応でもってキャッチしたのは、マスクをかぶったタコ坊主だ。

「バッターアウト！」

球審が叫ぶ。

「審判、選手交代だ。篠崎に代えて西村！」

車の窓からアリスの声が飛んだ。僕らが戻ってきたのに、すでに気づいていたのだ。

「西村、いきなり代打だいけるか？」と、真っ先に寄ってきたミンさんが帽子を投げてよこした。西村さんは肩で息を整えながらうなずく。

「……あの人、捕手やってんのか」

西村さんはタコ坊主をにらんで唇を噛む。

「初回からずっと捕手だ」とミンさん。

「じゃあ……肩は温存されてるってことだな。それで一点差は……でかいな」

耳鳴りがしてきて、西村さんの声がぼやける。

「ご、ごめんなさい、あたしエラーばっかりで」

泣きそうになる彩夏の頭をぽんぽんと叩いて、西村さんはバットを受けとる。僕は打順を確認した。中軸打者の西村さんが抜けたせいで、打順は変更せざるを得なくなっていた。こんなオーダーだ。

1　ミンさん（二）
2　友造さん（捕）
3　テツ先輩（遊）
4　岩男　（三）
5　四代目　（投）
6　電柱　（一）
7　少佐　（左）
8　ヒロさん（中）
9　彩夏　（右）

今は1アウト一塁。彩夏に代打を出して、なんとか少佐を進塁させればミンさんにつながる。犠打という選択肢だって見えてくるのだ。ここはもう、迷いなく西村さんが代打だった。

「なんや、間に合うたんか」
マスクを外したタコ坊主が、こっちを見て笑った。
「ほな、守備位置替えや。じぶんら、もう二塁踏めると思うなや」
そう言ってタコ坊主は、今の今までピッチャーをやっていた男にマスクを投げ渡した。
投球練習ですら、タコ坊主のストレートは震えがくるほどの鋭さだった。すさまじい荒れ球で、バッターがいないのにキャッチャーは何度か捕球しそこなった。
「あれ四十男の球じゃねえだろ……」とテツ先輩がうめく。
ミンさんが、とにかく粘って球筋を見させろ、と言って西村さんを打席に送り出した。でもそんな問題じゃなかった。押せ押せの剛速球一本のみで、西村さんもミンさんも三振にねじ伏せられてしまったのだ。
「こっちをなめてるわけじゃなかったんだな」
僕のすぐ隣のベンチで見ていた四代目が、苦々しく言った。
「あいつら、俺の球をめちゃくちゃ早打ちしやがるんだ。だから3点で済んだ。たぶん、さっさとイニングを進めたかったんだろう」
僕もうなずく。西村さんが病院でごたついている間に試合が終わってしまえばそれに越したことはないし、よしんば戻ってきたとしても、肩をたっぷり温存したタコ坊主が抑えればいい。一点差でじゅうぶんだったのだ。

マウンドを下りようとしていたタコ坊主と、目が合った。汗まみれのその顔には、なぜか凶暴さも冷笑も浮かんでいなかった。ただ心地よさそうな疲労だけがあった。
だから僕はふとフェアゾーンに踏み込んで、声をかけてしまう。
「……どうして」
タコ坊主が立ち止まって僕をにらんだ。
「どうして、あれだけすごい球を投げられるのに。昔はもっとずっとすごかったんでしょう」
「なんの話や」
「アリスが調べたんです。野球賭博の件」
タコ坊主の眉間に地割れみたいなしわが寄った。
「片八百長だったんでしょう。しかも、ネモさんがわざと負けたわけじゃない。わざと一点差になるようにして勝ったんだ。そういう細かい賭け方ができる賭博だったんですよね。だから何試合も続けて仕掛けられたし、オッズも高かった。それになにより、証拠がなかった」
「ほんまじぶんら胸くそ悪いガキどもやな。どうでもええこと詮索しくさって。したらどないやいうねん」
タコ坊主はマウンドに唾を吐き捨ててから僕をにらむ。それでも、言葉を続けた。
「わざと負けるより百倍難しかったはずです。ピッチャー一人でそこまで試合をコントロールするなんて。どうしてそこまで実力があったのに、ネモさんはやくざなんかに。もっとまともな稼ぎ方だってできたはず

です。八百長の証拠はけっきょく見つからなかったんでしょう、学校やめたりせずに、しらばっくれて野球続けてれば」
「黙れクソガキが」鉈のような声が僕の言葉を断ち切った。「実力？　寝言抜かすな。甲子園にはもっと化け物じみたのがゴロゴロおるわ。そいつらも、プロ入りすりゃほんものの化け物の中でプライド叩きのめされるんや。トップクラスの年俸見てみい、どんだけの化け物だらけの世界かすぐわかるやろ」

　僕は砂の味のする唾を飲み下した。気圧されて、ファウルラインの外に押し出されないようにとこらえるのが精一杯だった。

「わしごときの腕は、ああやって使うんがいちばん銭になったからああしただけや。わしの球なんてだれも憶えてへん。わしがどんだけでかい賭場でいわしたか、残ってるのはそれだけや。銭がからむからや。グラウンドでままごとやるやつ見ると吐き気がするわ。銭もつくれん素人はナイター中継でも見てはしゃいでりやええんや」

　一塁ベンチに戻っていくタコ坊主の背中を、僕だけではなく、隣に立った西村さんもじっと見つめていた。なにも言い返せなかった。だって、どんな言葉があの背中に届く？　僕はしょせん探偵助手で、死んだ言葉を掘り返すことと埋めることしかできない。あの人の球は、まだ生きているのだ。三十年前の夏に、凍りついたまま。

　けれど、西村さんは返すものを持っていたのかもしれない。タコ坊主と同じ、マウンドに立つ男だからだ。

九回の表、三人の打者を相次いで仕留めた西村さんのピッチングは、鬼気迫るものがあった。タコ坊主とちがって球速は地味で、空振りをとれる決め球もない。けれど畳みかけるような内角攻めと目が眩むほどの緩急をつけたスローカーブとで、きっちり打球を詰まらせてうちとっていく。

けれどベンチから見ていた僕は、その不安に気づいてしまう。

原因は西村さんじゃなかった。遊撃手の四代目だ。動きのキレが悪い――というか、あきらかに右腕や右脚をかばっていて捕球動作がおかしい。一塁への送球のときに顔をしかめている。異変にミンさんも気づいた。三人目の打者のライナーが四代目の正面を強襲したとき、グラブで弾いて捕りそこなった。センターに転がろうとした球を、勘よくカバーに入っていたミンさんがつかまえて一塁に投げたのだ。微妙なアウトのコールに、一塁ベンチのやくざたちが総立ちで塁審を罵った。でも、球審はまったく無視してチェンジを告げる。

ネクストバッターズサークルに膝をついていたタコ坊主は、マウンドの西村さんにしばらくじっと見入っていた。二人がすれちがうときにどんな視線を交わしたのか、僕は知らない。そちらを気にしているどころじゃなかった。四代目が二塁のそばでしばらくうずくまってしまったからだ。

「大丈夫ですか」

駆け寄って肩を貸し、引っぱり起こす。どすどすという足音が聞こえ、「壮さんッ」という声がステレオで響く。電柱と岩男だ。

「なんでもねえよ。ちょっと暑さにやられただけだ」

四代目のその言葉が嘘だというのは、すぐにわかった。三塁側ベンチに連れていくと、青い外国車のドアが開いてパジャマ姿のアリスが叫ぶ。
「その意地っ張りを早く車内に！　彩夏もだ、アイシングと包帯だ」
「うるせえ。ンなことしなくても平気だ」
「きみのやせ我慢の才能を恨むよ、よくもあれだけ涼しい顔で投球を続けられたものだ」
車の中に運び込んでみると、四代目の手足の傷のあちこちが開いて出血していた。手当てをしようとした彩夏も、口を両手で押さえて息を呑む。僕は寒気に震えた。そうだ、この人は数日間意識不明になるほどの全身打撲で入院して、出てきた直後だったのだ。忘れていた。
「おい園芸部、いいから試合見てろ。俺の打順までにあと三人ある」
「試合とか気にしてる場合ですか！　こんな身体で打つなんて無理——」
「うるせえ、いいからあのハゲのピッチングを一球も漏らさず見てろ！」
「ナルミ、四代目の言う通りだ」
僕は車から蹴り出されてしまう。憤りながらも立ち上がった。ピッチングを見てろ？　今さら僕が見ててどうなるんだ。九回裏、最後の攻撃じゃないか。上位打線から始まるのだから、僕が役に立つことなんて——
はっと気づき、打順を確かめる。

先頭バッターである2番打者、友造（ともぞう）さんが、胸元にえぐりこむ直球をバットの根本で受け、ピッチャーゴロに打ち取られる。次の打者は3番テツ先輩（せんぱい）、そして4番岩男。

試合を終わらせないためにも、だれかが出塁しなければいけない。そして、そうなれば5番の四代目につながるのだ。でも四代目はもう打席に立てるような状況じゃない。だとすれば。

テツ先輩はボクサーの目でタイミングをとらえ、何球かファウルで粘（ねば）った。けれど九球目の渾身（こんしん）のストレートが、テツ先輩のバットをへし折る。致命（ちめい）的な音に、思わず僕は頭を腕（うで）で覆（おお）っていた。キャッチャーフライがミットにおさまると、マウンドのタコ坊主（ぼうず）は帽子（ぼうし）をとって額（ひたい）の汗（あせ）を手の甲（こう）でぬぐった。僕も、運動しているわけでもないのに全身汗みずくだった。2アウトだ。追い込まれた。あと一人で、負ける。僕らのホームグラウンドが潰（つぶ）される。

サークルの中で立ち上がった岩男が、こっちを振り返って言った。

「絶対に、兄貴につなぎます」

僕は目を伏せてしまう。岩男が出塁したら。四代目の代打は、僕だ。そんな覚悟（かくご）はなにひとつできていないのに、戦場に引きずり出されて、あのタコ坊主の前に立たなきゃいけない。そのときの僕は、情けないことに——祈（いの）っていた。

こうしているうちに時間がものすごい速さで過ぎ去って、ふと顔を上げたらみんな終わっていますように、と。

だからその瞬間（しゅんかん）は目にしていない。

ただ、分厚い肉をえぐる鈍い音と、「デッドボール！」という審判の声を聞いただけだ。

はっとして目を上げると、一塁に向かってよろよろ走っていく岩男の背中が見える。マウンドの上ではタコ坊主がいらだたしげにロージンバッグをお手玉している。

岩男が、塁に出ている。僕の意識がひび割れて、その事実が染み込んでくる。

あの巨体で、文字通り身体を張って、つないだのだ。メオがベンチで飛び跳ねて喜んでいる。少佐とヒロさんがうなずきあっている。電柱が太い声で吼えている。最初に僕を見たのはミンさんだ。それから友造さん、そして全員の視線が、僕に集まる。

いや、待ってくれ。ほんとに僕なの？　運動神経もパワーもなくて、補欠で、ずっと見ているばかりで、自分に打席が回ってくるとさえ思っていなかったのに。こうして足がすくんで立ち上がれもしないのに。

背後で、車のドアが開く音がする。

「審判、選手交代！」

僕らの小さな監督の声が僕の背中にぶつけられる。

腰を浮かせ、振り向いた。

たぶん僕は、ほんとうに泣きそうなくらいにどうしようもない顔をしていたのだろう。視線が合ったとき、アリスの顔に、絶望と、憐憫と、それから怒りとが少しずつグラデーションになって浮かんだからだ。

次に僕は、彼女の信じがたい言葉を耳にする。

「代打、ぼくだ」
さら、と髪がこすれ合う音が僕の傍らを通り過ぎる。パジャマにニーハイソックスに野球ヘルメットの小さな後ろ姿が、焼けた土を震える足で踏みしめ、バットを引きずりながら打席へと遠ざかっていく。
「――アリスっ！」
我に返った僕は、それを追いかける。と、黒髪がひるがえり、青ざめた顔が僕に向けられ、バットの先が突きつけられる。
「なんだい。まさかきみが打席に立つとでも？　今のきみの萎えた心じゃ十中八九、三振でおしまいだ。引っ込んでいたまえ」
「いや、でも、アリスが出てどうするんだよ！」
「姐さん！」「アリス、顔色悪いぞ無理すんな」「おとなしく車内に」
小さな探偵はバットの先を地面に叩きつけ、寄ってきたチームメイトを一喝した。
「監督命令は絶対だ！」
土埃が舞う中、唖然とする僕らの視線を背中に受けて、アリスはよろめきながらバッターボックスに入る。さすがの球審もキャッチャーも、「いいのか？」と言いたげな目をこっちに向けてくる。
「なんの冗談や」とマウンドのタコ坊主が言った。笑みは浮かべていない。

「冗談でもなんでもないよ。ぼくはプレイングマネージャーだ。根本喜一、きみは関西生まれの野球人だったのだから、当然ながら初代ミスタータイガース藤村富美男のこともよく知っているだろう。『代打わし』の恐怖に震えるといい」

「姐さん惚れなおしましたッ」一塁上の岩男がわめく。

「よう喋るやっちゃな。一発インハイにぶちこみゃ黙るくせして——」

「審判！　早くプレイをかけたまえ！」

　球審はむっとした顔でマスクをかぶり、タコ坊主を指さして告げた。

「プレイ！」

　タコ坊主の目がすうっと細くなった。砲弾のような直球がホームベースの真上の空間を貫いてミットを派手に鳴らした。アリスの黒髪がふうわりと舞い上がる。白目を剥いて倒れるのじゃないかと思った。

けれど球審のコールを聞いて、僕はアリスの意図を理解する。

「ボール！」

「ンだとぉ！」「入ってんだろが！」「審判どこ見てんだ！」

キャッチャーを含め、やくざチームの何人かがいきり立つ。けれど球審はにべもない。

「……あれ、ど真ん中だったぞ?」と隣でテツ先輩がつぶやく。たしかに、他のだれがバッターボックスに立っていてもストライクだっただろう、でも。

公認野球規則2の73。

ストライクゾーンとは、打者の肩の上部とユニフォームのズボンの上部との中間点に引いた水平のラインを上限とし、ひざ頭の下部のラインを下限とする本塁上の空間のことをいう。

つまり、身長１３０センチにも満たないアリスのストライクゾーンは、すさまじく低く、縦に狭いのだ。

「フォアボール狙いか。なんて姑息な」と、西村さんがあきれた声を漏らす。「でも、その後はどうするんだ。万が一うまくいって一、二塁になっても、ワンチャンスで逆転は」

鈍い音とともに舞い上がった土煙がアリスを覆い隠した。ひどくむせるのが聞こえ、僕はプレイ中だということも忘れてアリスに駆け寄ろうとしてしまい、テツ先輩に引っぱり戻される。球審が再び「ボール!」と叫んだ。低めのボールがワンバウンドしたのだ。土煙が晴れると、ホームベースの手前の土に深くえぐられた痕が見える。僕はぞっとした。

頼むアリス、なるべくホームベースから離れたところに立ってろ。絶対にバットなんて振るなよ。あれが当たったら骨折どころじゃ済まないかもしれない。

その祈りを押し潰すかのように、タコ坊主の第三球がアリスの腹を穿った——ように見えた。自分の内臓が蹴り破られたかと思った。アリスはぺたんと尻餅をついた。

「ストライク！」

球審のコールと同時に僕はタイムをかけて、バッターボックスに走り寄りアリスを助け起こした。僕の腕にしがみついた白い指はぶるぶる震えている。

「……いち選手のくせに、なにをタイムなぞ」

「無茶すんな、外に出てるだけで気分悪くなるくせに、こんな炎天下に」

「さっさと離れたまえ、ここは戦場だよ！」

思いがけず強い力で、僕はフィールドの外に突き飛ばされた。球審がプレイを促す。

驚くべきことに、タコ坊主の四球目をアリスはスイングした。ボールのゆうに二個分上をバットが弱々しく薙ぐ。

「ストライク・ツー！」

審判のコールとともにアリスの身体が一回転して再び土の上にへたり込んだ。バットの勢いを引き留められなかったのだ。なんて非力な身体なんだ――わかっていたことだけれど。なんで振るんだよ、振ってどうなるんだ。でも僕は自分の考えに悪寒を覚える。振らずにいたってどうなる？　九回裏2アウトの打者だぞ、これでおしまいなんだぞ？

五球目が再び、豪快に地面をえぐり、跳ね返ってキャッチャーミットにおさまった。今度はアリスは必死にスイングを途中で止めた。

時間が止まったような気がした。わずかな風に、土埃が流される。アリスとキャッチャーが同時に球審を見た。僕らの視線もおそらくはそこに集まったはずだ。どっちだ。三振なのか。終わってしまうのか？

　球審はコールせず、一塁の塁審を指さした。ハーフスイングだ。球審のところから振ったかどうかが見えなかったために、判断を塁審に任せたのだ。

「スイング！」

　塁審が握り拳を突き出して答えた。目の前が真っ暗になった。

「ストライク・スリー！」

　球審が同じしぐさで応じる。膝が崩れ落ちそうになる。

　終わってしまった。試合終了だ。全身の汗が凍った滝みたいになる。歪み始めた視界の中で、アリスがバットを地面に放り捨て、ヘルメットを脱いで顔の正面にかかった髪をぱんぱんと払いのけ、「どこに目をつけているんだ！」と一塁に向かって歩き出した。

「振ってなんていないぞ、判定を取り消したまえ！」

　やくざチームの間から笑い声が起きる。外野手がぞろぞろと一塁ベンチに向かう。キャッチャーもボールを放り捨ててマスクを剝ぎ取り、笑って汗をぬぐう。

「やあ、くたびれたくたびれた」「ええ運動になったわ」「帰って飲むか」

「ふざけないでくれたまえ！」

一塁にたどり着いたアリスは、塁審が肩をすくめるばかりなのを見るとヘルメットをグラウンドに叩きつけ、今度は二塁塁審を指さしてそちらに向かう。

「きみはピッチャーの真後ろから見ていただろう、ぼくが振っていないと証言でき——」

そのとき。

マウンドを下りようとしていたタコ坊主が、はっとなにかに気づいた顔になり、二塁を振り返った。さらにはぐるりと踵を返してグラウンドを見渡す。僕も気づいた。隣の西村さんもたぶん気づいたはずだ。

一塁にいたはずの岩男を、捜しているのだ。

岩男は今まさに三塁を踏もうとしているところだった。僕らの三塁側ベンチに戻ってくる途中——ではない。なぜなら僕は視界の隅で、岩男が二塁を経由して踏むところをしっかり見ている。タコ坊主が額に青筋を寄せて叫んだ。

「ボールよこせ！　このくそアホまだインプレイや、守備離れんな！　三塁——いや二塁や、二塁に投げぇッ！」

アリスが青い顔になって走り出した。彼女の足ではまだ絶望的なまでの距離を残している。タコ坊主もマウンドを蹴って二塁ベースカバーに向かう。あわてたキャッチャーがボールを拾い上げ、投げた。

タコ坊主の巨体と、アリスの小さな青い影とが二塁上でぴったりぶつかり合った。

土埃(つちぼこり)が散る。まるで海岸に打ち上げられて乾いたあわれな藻(も)のように、黒髪(かみ)が地面に広がっている。腰(こし)を落として二塁を踏みしめたタコ坊主のグラブがアリスの頭を押さえつけ、けれど彼女の細く小さな手が伸びて、しっかりと塁の端(はし)をつかんでいる。

「……セーフ!」という塁審のコールの後で、ぞわぞわした静寂(せいじゃく)がグラウンドに広がっていく。タコ坊主はボールをつかんだまま、憤然(ふんぜん)と立ち上がってマウンドに戻る。この場の何人が、いったいなにが起きたか理解できただろう。

「……三振だろ。試合終了じゃないのか」

ミンさんがすぐ後ろで言った。西村(にしむら)さんが不思議な生気に満ちた目で首を振る。

「振り逃げです」と僕も興奮を隠(かく)しきれない声で答える。

「振り逃げ……って、だってあれキャッチャーが球(たま)そらしたときじゃないのか」

「ちがいますよ。ワンバウンドで捕(と)っても振り逃げ成立です。三つ目のストライクをキャッチャーが直接捕れなかったら、打者は球を打ったときとまったく同じように走者になるんです」

でも、だれが思い至る?　振り逃げの走者が、2アウトの状況で、塁審(るいしん)のジャッジに怒るふりをして歩いて一塁に向かうなんて。しかもアリスはあろうことかヘルメットで胸を払(はら)い、進塁サインを出していたのだ。一塁走者が岩男(いわお)でなければそれがサインであることにすら気づかなかっただろう。あの馬鹿はこの一

週間、空っぽの頭にたった二つのサインだけを叩き込まれ続けていたのだ。だから、状況は理解していなくても、アリスの意図に身体が反応した。
　マウンドに戻ったタコ坊主が悔しそうに、土をしきりに蹴っている。風が心なしか強まっている。僕の鼓動も、だ。
　おそらく、アリスの狙いは最初から四球ではなく、これだったのだ。
　四球ならばランナー一、二塁にしかならない。得点圏内に二人を送り込み一打逆転の状況に持ち込むためには、これしかなかった。
　アリスが二塁ベースをずるずると引っぱり寄せるようにして起き上がった。顔が土まみれだ。あの二ト探偵のこれまでの生涯で、土汚れを浴びることなんてあっただろうか。
「審判！　選手交代！」アリスが叫んだ。「代走、メオ！」
「えーっ？」
　メオは驚き半分喜び半分でベンチから弾かれるように立ち上がり、二塁に走る。ちらっとバックネット裏を見たら草壁昌也の形相がサングラスを突き破りそうだ。でも、球審が草壁を振り返っても、なにも言わなかった。認めるらしい。
　ぼろぼろになって戻ってきたアリスを、総出で迎える。
「姐さん、さすがっスよ！」電柱がアリスを押し潰しそうになる。

「よくまあんな大胆なことを」と少佐があきれる。ミンさんが、ふらつくアリスの身体を抱きとめる。
でも、アリスは顔を起こして首をねじり、打席に目をやる。
「……まだだ。まだ終わってない」
「いいから車戻れ、おまえ顔がもう蠟みたいだぞ」
そう案じるミンさんの胸を押しのけて、アリスはなんとか自分の頼りない両脚で立つ。
その両眼が見つめるのは、僕だ。
「……わかっているね？」
うなずき返す。
アリスは、僕につないだのだ。
2アウト二、三塁。ここで正規打順の6番打者・電柱に回れば、おそらくは敬遠されて満塁策で少佐の打順になる。なら、僕の使いどころは今しかない。封殺の起きない絶好機で、タコ坊主が勝負してくれるとしたら、このチームのだれよりも雑魚である、僕しかいない。
だから僕は電柱からバットを受けとり、テツ先輩の手でヘルメットをかぶせられ、打席に向かって歩き出す。選手交代を告げるアリスの声が、僕の背中を押す。
「さんざん引っかき回しよって。もうそういうイカサマが通用するて思うなや」
マウンドのタコ坊主が苦々しげに僕をにらんで言った。

「三振で終わらしたるわ」
それならかえってありがたい、と僕はグリップを確かめながら思う。真っ向から来てくれるなら、こっちも返すものがある。それが正しいものかどうかも、わからないけれど。
　向かい合って白球にぶつけ合わなければ届かない。それだけは、たしかだ。
　だから僕は一球目から振った。バットを根本からへし折りそうな衝撃が手首を伝って肩、奥歯にまで響く。すさまじいスピンのかかった打球が頬をかすめ、バックネットを鳴らした。
　タコ坊主の顔がかすかに歪んだ。さほど気を入れない直球だったのかもしれないが、タイミングを合わせられるとは思っていなかったのだろう。
「じぶん、くっちゃべってはったりかますんが専門やなかったか」
「……ええ。身体動かすのは、さっぱりですよ」
　答えながらも、タコ坊主を見据える。きみは目だけはいい。何度もアリスに言われたことを思い出す。どこまで粘れるだろう。いや、粘らなくちゃいけないのだ。二球目、内角に食い込んできた速球にぴくっと反応する肩を押さえつける。ボール半個分外れていた。三球目で一気に外角に振られ、これには手を出してしまう。ただの直球のはずなのに、僕のバットはボールの五センチも手前の空を切った。
　タイムをかけ、ヘルメットに押さえつけられた髪の間から落ちてくる汗をぬぐう。耳鳴りがひどくなっていて、なにも聞こえない。タコ坊主の肩越しはるか先にメオの小さなコーヒー色の影がぼやけ、視界の左

端に岩男の巨体がかなり大きなリードをとっている。
　絶対に、ここで終わるわけにはいかない。
「とっととあきらめりゃええのに、しつこく粘るなあ、じぶんら」
　タコ坊主がマウンドの土を足でならしながら言う。
「なんやその目は。なにかできると思うとんのか。口だけのくせして、その要らん自信はどこから出てくるんや。あのくだらんゲームで鍛えた、とか言うつもりやないやろな」
「その通りですよ。ネモさんにとっちゃくだらんゲームかもしれないけど」
　四球目の低めのストレートが僕の言葉を断ち切る。わずかにバットの先がかすった。キャッチャーが横様に打球に飛びついたときは心臓が凍った。でも白球はミットに弾かれ、ネットの裏に転がっていく。だんだんと目が球速に慣れてきた。見える。タコ坊主の肩が暖まってきたのか、コントロールも球の切れもどんどん増している。くさいゾーン際に外した誘い球が二球続き、どちらもファウルになんとかさばく。指が痺れて、もう感覚がないに等しい。球が見えていたとしても、球速がまったく衰えないまま直球で押され続けたら、なにもできない。なにせタコ坊主、八回からの登板なのだ。スタミナが有り余っている。
　だから、一球だけ仕掛けた。釣り球にバントの構えをしてみせたのだ。すんでのところでひっこめる。２ボール目。タコ坊主の眉間に皺が寄る。その目が、ちらと三塁の岩男を見た。そうだ、頼むから走者を意識してくれ。２アウトだけど、セーフティバントだって、ホームスチールだってあり得るんだぞ。

八球目、インハイに突き刺さった速球にも、僕はなんとか合わせた。バットが弾き飛ばされる。のけぞりながら、ファウルグラウンドに転がる球を目にして、倒れるのをこらえる。まだいける。まだしがみつける。それに、タコ坊主の投げ方がわずかに変わった。投げる前にグラブの中で握りを一瞬だけ確かめている。もう一球、かなり外したインハイ。これにも食らいついた。絶対に、フルカウントにだけはしたくなかった。タコ坊主があきらめて僕を歩かせてしまうかもしれないからだ。そのプライドを、胸の底で三十年間くすぶり続けていたはずの熱を、煽り続けなきゃいけなかった。

そうして、兆しが訪れる。セットポジションのときに、タコ坊主がはじめてのことをした。ちらと、二塁のメオを見たのだ。

変化はそれだけだった。振りかぶるフォームにも、振り下ろされる腕の勢いにも、今までとまったくちがいがなかった。だから僕の信じる心が揺らぐ。銭にならへん野球なんてゴミなんや。いつかのタコ坊主の言葉が頭を巡る。でも僕らはそのゴミに夢中になって時間とコインとを注ぎ込み続けた。プログラムが創り出したゴミみたいな嘘の球場に、僕らは本気を賭けていたのだ。なぜならそこは僕らの場所で、同じようにゴミみたいな本気を受け止めてくれる仲間がいつだっているからだ。あんただって最初はそうじゃなかったのか？　そうだろ？　僕は信じてる。あんたの球に、銭には変えられないゴミみたいに美しい部分がかつてあって、それは絶対にだれかの胸に届いて、残っているはずなんだ。

だから僕はそのボールを、凪いだ心で待った。

ストレートは、実は変化球なのだという。いつか読んだ本に書いてあった。

投げたボールは重力に引かれて落ちるのが当たり前で、高速バックスピンによってそれに逆らいまっすぐに飛ぶストレートは不自然な球(たま)なのだと。縦(たて)回転を殺し、放物線を描いて落ちてくる――フォークボールこそが、自然な球なのだと。

だから、じっと待って、球を見つめて、スイングを叩(たた)き込む。それだけでよかった。
痺(しび)れるような甘(あま)い感触(かんしょく)が手に伝わってきた。音は信じられないくらい遅れて聞こえた。それから骨が震(ふる)えて軋(きし)んだ。背後で沸き上がった歓声が僕の首筋に吹きつける。小さなコーヒー色の影が走り出すのが見える。はるか左手から大きな影が迫ってくるのも見える。僕はスイングの勢いそのままにバットを投げ、雲を踏むような足取りで走り出した。

　打球の行方(ゆくえ)は見てもいなかった。気づくと足下を薄汚(うすよご)れた一塁(るい)ベースがすっ飛ぶように過ぎていった。そこで僕の緊張(きんちょう)はようやく、しかも唐突(とうとつ)にぶっつりと切れた。膝(ひざ)が折れ、土の上に顔から倒れそうになる。両手をついてこらえ、身をねじって一塁に這(は)い戻り、すさまじい酸欠の頭痛の中でようやく顔を上げて、僕がほんの数秒前までいた場所を見やる。

　メオの小さな身体(からだ)がホームベースの上を駆(か)け抜け、待っていた岩男(いわお)の腕(うで)の中に飛び込むところだった。外野からの返球は、むなしくマウンドのあたりに転がる。

　サヨナラゲームだ。勝ったのだ。身体のそこかしこから汗(あせ)が噴(ふ)き出す。耳や目からも。ひょっとしたら涙(なみだ)とか鼻水も出ていたかもしれない。僕は一塁ベースに腹這(はらば)いでしがみつき、得点走者のメオを総立ちで出迎えてもみくちゃにするチームメイトたちを眺(なが)めていた。

ええと……なんか僕、忘れられてない？　いや、みんな興奮してて心の余裕がないだけだよね。まだ勝ったなんて実感がないし。でも球審が試合終了を告げ、塁審たちがバックネットの方へと引き上げ始めても、まだだれも僕を見ようともしなかった。ひでえ。決勝タイムリー打った殊勲選手なのに。

だから、最初に僕のもとに寄ってきて助け起こしてくれた——というか襟首をつかんで強引に立ち上がらせたのは、タコ坊主だった。

視線を合わせられず、かといって逃げ出すわけにもいかず、僕は「あ、え、ええと」と曖昧な声を口の中で転がしながらうつむくしかない。タコ坊主がどんな表情で僕をにらんでいるのかも、たしかめる度胸がない。

「助手さーんっ」「藤島くん！」

きらきらした声をあげて、ようやくメオとか彩夏が、その後ろから電柱や岩男がこっちに駆け寄ってくるのだけれど、タコ坊主に気づいてみんな足を止めてしまう。そんな怖い顔してるのかよ。もう一生顔を上げられないような気さえしてきた。

でも、僕が叩き潰したのだ。彼のプライドを。

だから、受け止めなきゃいけない。いつまでもうつむいているわけにはいかなかった。

目を上げると、そこには汗ばんで火照ったタコの顔。悔しさにぎらつく両眼。

「……なんで……知っとった」

タコ坊主が押し潰すような視線で僕をにらみながら言った。
「わしのフォーク。待って打ったな。なんで知っとった。あそこで投げることまでわかっとったんか」
「……はい。知ってました」
答えると、喉がひどく痛んだ。熱した砂を喉の内側に塗りたくられたみたいだ。
「確証があったわけじゃないです。でも、ネモさんの決め球がフォークなのも。ランナーを背負ったときに、握りを見られてないかどうか二塁を一瞬だけ確認する癖も。知ってました」
タコ坊主の目が見開かれる。その指が僕の肩にきつく食い込んだ。
「なんでや。わしが公式戦に出てたのは三十年前やで。記録も残ってへん。投球の癖まで？　そないなことあるか、どうやってッ」
「残ってたんですよ」
僕はタコ坊主の腕を振り払って、その目をまっすぐ見つめ返す。
「ネモさんがあれだけ嫌ってた、野球ゲームの中に、残ってたんです」
タコ坊主の半開きになった唇が震えた。信じたくないのだろう。でも、僕はたしかに見つけたのだ。根本喜一という名前から、『パワレボ』のシステムが導き出した選手データ。それが、僕の情報源のすべてだ。
「アホ抜かせ」タコ坊主は乾ききった声でうめく。「なんでゲームなんかに……わしの、たかが甲子園でなんぼか投げただけの……」

「あのゲームは、パブリックデータベースを使ってるんです。わかりますか、だれでもアクセスして選手データを集積できるんですよ。だれかが、登録したんです。根本喜一投手を」

　僕は言葉を切って、タコ坊主の表情に広がっていく夜明けの雲みたいな色を見つめる。

「ネモさんのことを知っていた、だれかです。たぶん投球を直に見た人です。ねえ、だれも憶えてないなんて嘘です。みんな忘れられるなんて嘘ですよ。あれだけの剛速球が、だれの心にも残らないはずがない。だいいち、ネモさんだって野球を忘れてなかったじゃないですか。今でもあれだけのピッチングができるじゃないですか。だったら」

　タコ坊主は僕の言葉を最後まで聞かなかった。背を向け、野球帽とグラブを投げ捨て、歩き出す。

あんたが忘れてないなら、野球の神様だってあんたが投げたあの夏を忘れてないよ。

　僕の言葉の続きは、汗の染み込んだ土に落ちて消える。

　マウンドの脇で、タコ坊主は西村さんとすれちがう。勝利投手と敗戦投手が交わす挨拶は、小賢しい探偵助手の弄する百の言葉よりもずっとシンプルで、ずっと雄弁だ。

　西村さんはただ帽子をとって、深々と頭を下げる。

　タコ坊主は、ちょうど足下に転がっていたウィニングボールを拾い上げ、投げ渡す。

　それだけだった。一言もなかった。

あんな戦いの終わりも、悪くない。そう、ちょうど『パワレボ』のオンライン対戦の終わり方に似ているのだ。〝Nice Game〟とだけメッセージを交わし、ときにはお互いのユニフォームのデータを贈り合う。それだけのやりとり。

プログラムが組み上げた嘘の球場と、今こうして僕らが立っている現実の球場とのちがいがひとつあるとしたら、戦いの熱を優しく冷ましてくれるこの風だろう。これを浴びるのだけは、おそらくスポーツマンの特権なのだ。

だからもう少しだけ、浸っていたかった。

＊

『GAMEにしむら』の四階に組事務所が引っ越してきたのは、翌週のこと。

僕が放課後にひとりで店に寄ると、ごちゃごちゃと入り混じったゲームBGMの間に、ドリルの音やハンマーかなにかの音が聞こえる。なんの工事だろう？

「階段、裏にも増設するんだよ。組が金出して」

バックルームに顔を出すと、西村さんが教えてくれた。

「事務所に出入りするときに、いちいちガキどもを見たくない、って根本さんが言うんだ」

でも、と僕はバックルーム入り口から店内一階を見渡して思う。今日も昼間からガキどもがフロアを埋め尽くして『パワレボ』に興じている。タコ坊主は、この客たちを怖がらせたくなかったんじゃないのかな。自分たちのせいで客が減って『にしむら』が潰れてしまったら、それは「店を続けさせる」という約束に反してしまう。

そう言ってみると、西村さんは「かもな」と笑った。

「ほんとに……ありがとう。みんなには世話になったよ」

「あーいや、頭下げないでください」

僕はあわてて椅子から立ち上がって言った。

「僕らが勝手にやっただけですし。そもそも少佐が最初にヒートアップして」

「そういうのは関係ないよ。俺から頼んだ形なんだし、ちゃんと金は払う」

「四代目とかミンさんとか友造さんには、少佐がいくらか払っちゃったんですよ。少佐が呼び集めたわけだから」

「立て替えてもらったのか。悪いな。今月、基盤の先払いがあったからちょっと苦しいんだけど、請求書回してくれって少佐に」

「それで、西村さんからはお金じゃないものでもらおうって、みんなで話し合ったんです」

「……現物支給？　なんだ、ゲームのメダルとかじゃないよな、まさか」

「ええと、つまりその、野球のコーチをやってもらおうかと」

西村さんは目を丸くした。

「なんかうちのごろつきニートたちが、はまっちゃったらしいんですよね。平坂組でも、岩男や電柱の他にもやりたいっていうやつがいて」

たぶん、すぐに冷める熱だとは思うんだけど。西村さんの顔には、実に様々な表情が踊った。でも嬉しくてしかたがないのだろう。それだけはわかる。膝の上の手が、まるでそこにはない野球ボールの形をたしかめるみたいにして何度も握られたからだ。

「でも対戦相手がいないんですよね。平坂組を全員誘えば十八人にはなるけど、ピッチャーとキャッチャーやれるやつは限られてるだろうし」

「隣のバッティングセンター、なんか機材がいっぱい運び込まれてただろ」

いきなり西村さんが言った。僕は首を傾げる。

「そういえば。いよいよ取り壊すんですか」

「いや、改装するらしい。どっかの組がらみの不動産業者が買い取ったんだって」

「はあ」

「最近、変な噂があってさ。真夜中にあのバッティングセンターで、海坊主みたいなやつがひとりで打撃練習してるんだって。怪談だよな」

僕はしばらく考えた後で、西村さんの言っていることに気づき、思わず天井を見上げてしまう。それから手と首をぶんぶん同時に振った。

「いやいやいやいや。もうかんべんしてください、かたぎと試合やりたいですよ」

西村さんは大笑いした。

「そもそもナルミ君のチームがかたぎじゃないじゃん。無理言うなよ」

そういえばそうだ……。ミンさんや友造さんといったまともな社会人は、仕事があるので、定期的に野球やっているひまなんてない。チームはニートだけで構成されることになる。

「でも、わかった。コーチ引き受けたよ。ああそうだ、リアルな野球もいいけど、たまにはうちで『パワレボ』もやってくれよ？　来年くらいにバージョンアップするって話だし」

僕はうなずいて西村さんと握手し、『にしむら』を出た。

「そんなわけで、現金収入にはならなかったから、アリスへの報酬も払えないんだ」

探偵事務所に顔を出し、おそるおそる言ってみる。探偵はもちろん激怒した。

「許しがたい甘さだ、あれだけ人を動かしておいて報酬なしだってっ？」

額に巻いた保冷剤がずり落ちる。打席に立ったり全力疾走でヘッドスライディングしたりがよほど身体に負担をかけたらしく、あれからアリスはずっと寝込んでいたのだ。

「このぼくが監督に加えて代打までして店舗ひとつを救ったというのに報酬なしとはね、きみたちに比べれば蟻とアブラムシの方がまだしも経済感覚を持ち合わせているよ！」

「楽しかったからいいじゃんか……ちゃんと少佐が、探偵団以外にはお金払ってるし。アリスのぶんは僕の給料から引いておいてよ」

　こいつ、前から思ってたけど、意外と金にがめついんだよな。

「きみからもらえばいいという問題じゃない、対価が発生したという事実そのものがこの資本主義社会では重要なのだよ」

「だから西村さんがコーチやってくれるって。アリスも野球けっこう気に入ったんじゃないの。もう代打やれとは言わないけどさ、また監督やれば」

「あんな野蛮な競技は、まっぴらごめんだ。きみの請けた仕事が関わっていたから例外的に力を貸しただけだよ、きまっているだろう」

　アリスはぷいとベッド脇のモニタの方を向いてしまう。

「そんなことよりも報酬だ。給料から引けというその言葉を後悔はすまいね。野村克也の選手兼監督時代の年俸は五億円で、ぼくの働きはこれに匹敵するから、実働時間を一時間三十分として換算すれ

ば……」

なにがなんだかよくわからない空恐ろしい計算で、アリスは僕のこの夏の給料をがりがりと削り始めた。これ以上ここにいるとろくなことにならないと思ったので、ドクターペッパーの空き缶を集めてそうっと事務所を出る。

でも、アリスだってあのグラウンドに立って、あの風を浴びて、白球に自分の血と汗を刻んだのだ。忘れられるはずがない。

その証拠に、クマのぬいぐるみのひとつに、野球帽がかぶせてあったのだ。

✽

それからしばらくして、ネット上で『パワープレイボール』に関する奇妙な噂が出回った。一般人の名前ばかりの選手を集めた変なチームが連戦連勝しているというのだ。全国ランキングにも載った。不思議なことに、それほどの強豪でありながら、どこのゲームセンターを根城にしているどんなプレイヤーなのか、まったく情報が浮かんでこなかった。自分の家に基盤を持っている大金持ちか、あるいはゲーム会社のサーバをクラッキングして直接プレイしているのではないか、との憶測も流れていた。

チーム名は『はなまるニートティーンズ』という。

ユニフォームのエンブレムは、もちろん可愛らしいクマである。

あとがき

２００４年のオフシーズン、大阪近鉄バファローズはオリックスに営業譲渡し、五十五年に渡る歴史の幕を下ろしました。その最後の監督は梨田昌孝。近鉄にとっても梨田監督にとっても、ついに日本シリーズ制覇を果たせぬままの幕切れでした。

それから五年後、２００９年の冬。梨田監督が日本ハムファイターズを率いて巨人軍と戦い、またも夢叶わず敗れた、その一ヶ月後に、僕は京都旅行で伏見稲荷を訪れました。あの有名な千本鳥居をはじめ、境内にある万を超える鳥居はすべて信者から奉納されたもので、裏側に奉納者と年月日が彫り込まれています。そのうちの一本に、僕は見つけました。

『大阪近鉄バファローズ　梨田昌孝』

奉納は２００６年10月。球団最後の試合の、二年後でした。

東京に戻った僕は、しめきりの迫っていた短編を書き始めました。当初、編集さんにはまったくちがうプロットを提出していたのですが、いちからつくりなおしてべつの話にしたのです。野球の話を書かなければいけない。書くとしたら短編集の最後の書き下ろし――ここしかない。そんな想いに駆られてのことでした。

雑誌に掲載された短編を一冊にまとめるというのは、はじめての経験です。最初の一編はなんと三年前に書いたものです。読み返してみるとあきらかに今のアリス、今のナルミとはちがいます。けれど、修正は話の導入をスムーズにするためだけの最低限のものに留めました。作中でも、ナルミがあの街にやってきてからちょうど一年がたとうとしているのです。様々なことが移ろいゆくのは当たり前です。変わることはあっても消えてしまうことはない、というのがこれまでに僕の書いてきたことのすべてです。これから先もそうでしょう。

近鉄バファローズという球団はもうありません。けれどそのいのちは形を変え、多くの球団とファンの中に、そして僕の小説の中に、今も息づいています。

こんな感じの感動的なエピソードで締めておけば、プロット完全変更のうえ原稿が遅れてしまったことも、担当さんはゆるしてくれるのではないかと思います。

今回もまた、同時期にドラマCDが発売となります。僕も再び原案で参加させていただきました。それから、六月には「月刊コミック電撃大王」でT-iVさん作画による漫画版の連載が始まります。どちらもどうぞお楽しみに。担当編集湯浅さま、イラストレーターの岸田メルさまをはじめ、この作品を支えてくださっている方々に、この場を借りて厚く御礼申し上げます。

二〇一〇年二月　杉井(すぎい)光(ひかる)

杉井（すぎい）　光（ひかる）

1978年、東京生まれ。池袋に引っ越してきてから、ずっと鶏ダシのラーメンばかりを作っていたが、ついに豚骨を売っている店を発見。異常な安さに恐れおののく。ついラーメン一杯の原価計算などしてしまう。友人の作家にもラーメン屋やれよって言われました。

岸田（きしだ）メル

1983年生まれ、名古屋在住。好きな食べ物はラーメン。好きな飲み物は水。趣味は教育テレビを見ること。絵を描いてるときもずっと見てます。ホームページはhttp://maigo.jp/

本書に対するご意見、ご感想をお寄せください。

電撃文庫公式ホームページ 読者アンケートフォーム
http://dengekibunko.jp/
※メニューの「読者アンケート」よりお進みください。

ファンレターあて先
〒102-8584　東京都千代田区富士見1-8-19
電撃文庫編集部
「杉井 光先生」係
「岸田メル先生」係